

青年は、ロンの兄弟槍  
を片手に黄金の杯で酒  
を飲む

儀田 佳宗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——ある所に、騎士王アルトリア・ペンドラゴンに恋心を持った人間がいた。

彼は辛い現実世界のせいで摩耗した魂の唯一の救いとして、彼女を求めた。

その結果、彼は厨二病を再発してしまい自分の血でFate公式の魔法陣を描く。

そして、召喚の文言を唱えるが結果はもちろん何も起こらない。

そんな中で悲しみに暮れていた彼だが、彼が崩れ落ちてから少しした瞬間、魔法陣に一陣の風が通りぬかけ、光が迸った。

そして、彼のテンションと共に光は輝きを増して行き

変なテンションのまま「来てくれ、セイバアア!!」とか言ってる間に——彼  
の体をその中へと引きずり込んだ。

「あ？」

——目が覚めたのはどことも知れぬ森の中。

獣に追いかけてられて川に逃げ込んだ彼は流れ着いた先の木陰で、彼は黄金の杯と布に  
包まれた赤い槍を持った、生前「ギヤラハッド」と呼ばれていた一体の白骨の遺体に遭  
遇した。

これは、大人になつてもなりきれなかつた青年が、時に情けなく、時にみつともなく、  
時に聖人のように、時に

面白おかしく、時に真剣に、時に仲間を増やし、時にずる賢く、時に自分を犠牲にし、  
時に

.....  
そして、未来に《黄金の王》と共に人理を《清める》1人の人類の《審判者》になるための始まりの物語である。

---

これは、最近のFateの二次創作を見て思いついた話です。

基本的には第5次聖杯戦争かグランドオーダーまで繋げられたらいいかなと思います。

あと、基本的に主人公はチートでアホです。

なぜだ・第5次のプロットばかり進む

.....

# 目次

Prologue 夢の狭間、最優の騎士との出会い

第1話 次元を超えて、愛した者は

第2話 森の逃走劇の末に

第3話 死と奇跡の境界線

第4話 最優の騎士と聖遺物

宝具・聖杯の設定

第5話 希望と美しい旅立ち

第一章 旅の始まり、王への願い

第6話 第1村人はトラブルと共に

86

第7話 大禁樹の森

第8話 メルガルダの村にて

第9話 相容れぬ価値観

第10話 月下の剣戟(前編)

193

第11話 月下の剣戟(後編)

213

第12話 望まぬ花園での会合

245

13話 魔術師とこれから

267

172 133 112



Prolog 夢の狭間、最優の騎士との出会い

## 第1話 次元を超えて、愛した者は

「ッあゝ、まじでえゝ、やってらんねえゝよ。こんな世界」

そこは深夜の森の中。そこに1人の青年の声が響く。

この森は未だ神秘が残っている数少ない貴重な森だ。

もちろん魔獣の類がうじゃうじゃいる。

そんな中、この森のピラミッドの最底辺とも言える人間が大声を出して騒ぐなどまさに自殺行為でしかない。

安眠妨害された獣たちによって食い殺されるのがオチだろう。

「ツたくよゝ、なゝんで俺がこんな目に」  
おっと、酒がねえ。おいッ！酒もつと出せや  
!!」

しかしそんなことお構い無しに青年は自分の持っている黄金の杯に「酒を出せ」と要

求する。

はたから見たらただの酔っ払ったアホの妄言だが、その杯は命令通りに酒を出す。

しかも、最高級のワインを。

「おう、これこれ。っあ、最っ高!! マジこんな酒がないとやってられませんよおう。ねえギヤラハツドさん!!」

そう言いながら彼は自身の横で気に身をあずけている上等な鎧を着た白骨の遺体に話しかける。

——もう分かっている人もいると思うが、そう、彼の持っているものは「聖杯」だ。



しかも、聖杯戦争のために御三家が作り出した模造品ではなく、最後の晩餐にてキリストが使用しその血を浴びた「真の聖杯」である。

本来の聖杯の効果は「形而上の存在を汲み上げ、物質に転換する」とされている第3魔法のその更に上で、理論上は第1から、現代に至っても未だ解明されていない第6魔法までの使用が可能とされている。そのため、本当の意味での願いの実現が可能だ。

どちらにせよ、明確に願いを唱えなければならぬが。

そのため、誰も理解していない第6魔法や第5魔法などほとんどの魔法は使用不可だ。

「まあ、その詳細を聖杯に聞き出して理解すれば行使は不可能ではないが」

そして、そんななんでも出来ちゃう聖杯くんで酒を飲んだならば聖杯の中に内包されている莫大な魔力が体の中に侵入し、並の人間ならばその莫大な魔力に体が耐えきれず『存在自体がエーテルへと変換され爆散する』。

また、これを英雄や神族が行った場合最低でも四肢の爆散は免れない。

普通の魔術師が聞いたら「豪華でアホなこの上ない死に方だな。」と言うだろう。どこぞの花の魔術師が聞いたら「え？そんなことするバカがいたら真つ先に千里眼で見えて笑い転げるよwww」とでも言うのでは無いだろうか。

もちろんこの男は英雄でも、ましてや魔術師ですらない。

魔術の魔の字も知らないただの一般人だ。

では何故、このアホはそんなことをして平気なのだろうか？

その原因は、彼が傍らに置いている血のように真つ赤に染つた槍にある。

また、これが魔獣達が彼に近づけない原因でもある。

———そこから放たれているのは圧倒的な威圧感。

そう、何を隠そうアーサー王伝説においてかの最優の騎士と名高きギャラハッドが死の直前聖杯と共に抱いていた「血滴る槍」——「ロングヌスの槍」である。またガラ

ハツドの書記曰く、これは騎士王の持つ「ロンゴミニアド」と全く同じ、空から降つてきた特殊な金属で時を同じくして作られたため、「ロンの兄弟槍」とも呼ばれている。

それを手にした者は世界を支配すると言われているほどの槍が、何故こんなアホに使われているのか、そして何故かの真の聖杯が矮小で魔術すら知らぬ男の願いを叶え続けているのか。

事の発端は4日前に遡る。

俺——園崎 雄太はアルトリア・ペンドラゴンが大好きである。

いや、愛していると言っても過言ではない。

いきなり何を言い出すかこのアホはと思うかもしれないが、少し待って欲しい。

え？くつそわかりみ？

貴様は同士か、歓迎しよう。

そんなことは置いといて、ちょうど何度目かも分からないUBWの鑑賞会と共に「第64回アルトリアの魅力発見脳内円卓会議」が終わったところだ。彼女の素晴らしさについてサラリと述べようと思う。

まず言うまでもなく顔。

これについては言葉を述べなくても皆わかっているだろう。

次にその髪。

ああ、その金髪は本物の黄金の何十億倍も煌びやかに燦々と輝いている。

更にその性格。

語るまでもないな。

男勝りで、

己を律し、

他を尊重する。

人間の鏡だ。

.....  
きっと、世界中の人がこんな性格なら争いなんて起こらないだろうな。

そして何より、時折見せるそのスマイルツ!!

.....  
あの爆発力と言ったら、ビッグバンを優に超えるだろう。

.....  
まあ、特筆すべきはこんな所か。

強さとかは頼もしいが、やはり女の子に無理はして欲しくないなあ。でも、セイバー騎士だもんなあ。

しかも願いの根本も間違ってるもんなあ。救われねえなあ。

そうだ、セイバー呼ぼう。

この男、アホである。

何を血迷ったか、バカバカしい極論なるものに至ったらしい。

しかし待つて欲しい。この男がこうなった原因はちゃんとある。

最近の彼は就職したての社会人一年目のひよっこだった。

親は母親だけの片親で、その母も病気を患っている。

父親は幼い時に交通事故で他界した。

そんな状況でも彼は母親に苦勞をかけたくない一心で、高校卒業後直ぐに職場に付き一人暮らしを始めた。

彼が1番運が良かったのは、その新しく入った会社にコネがあつたことだろう。

そのの部長さんはなんとオタクで、SNS上で知り合つたのだが、その時に自分の状況を説明すると「ここに就職してみなさい。私が何とかしよう。」と言ってくれた。

初めはふざけているのかと思つたが、実際に行つてみると辛くも受かつていた。

こんな時代になんと人情の厚い人がいたもんだと柄にもなく感動した。

ただし、条件として「会社に入る所までしか私はサポート出来ない。後の資格やら仕事やらは自分自身で努力すること」ということが出された。

この会社は大手とはいかないまでも、その手の世界では有名な会社なので昇進するには多くの資格が必要となる。

そのため、安定した生活を送るためには仕事と資格取得のための試験勉強との板挟み生活が強いられた。

だが、ここで頑張れば母を養うことも出来るしなにより、自身の将来のためになる。

しかし、周りは大学卒の年上の同期ばかりで職場には全く馴染めず試験勉強も勉強しても勉強しても理解が追いつかないことが多かった。

・そんな中で唯一の希望が彼女——アルトリア・ペンドラゴンだった。

彼女のひたむきな折れない心に彼は惹かれた。

いつしか現実にはいない彼女に恋心すら抱くまでに。

そんな苦痛と恋心の狭間で混乱した彼の精神は正常な判断力を失った。

所謂「厨二病」の再発病である。



現実と空想の認識の境目が薄れてゆき、現実を現実として認識できなくなるものだ。

そして、彼は心では無駄だと分かっているながらも1%すらない可能性にかけた。  
出なければ彼の心が壊れてしまいそうだったから。

そして、三日三晩かけて彼は Fate の魔法陣を完璧に再現した。  
もちろん自身の血を触媒にして。

初めは痛かった指の切り傷も既に3日目には慣れ、かさぶたを切って血で描いた。  
触媒には彼女の剣「エクスカリバー」と「カリバーン」のレプリカを数本用いた。  
▪▪▪ 自分は狂っているのだと、心のどこかで感じながら ▪▪▪

そして、彼はネットで完璧に覚えた詠唱を始める。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

——降り立つ風には壁を。

——四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路さんさろは循環せよ。」

大丈夫だ。きつと来る。▪▪▪ 貞子じゃないよ!?

——安心してつむぎ出した言葉は——

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

——繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻ときを破却する。」

まだ、魔法陣に変化はない。

原作ではこの辺りで既に薄く発光していたはずだが

.....

——徐々に不安から来る震えを孕みだし——

「告げる。」

——汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

■ ねえ、そろそろ反応してもいい頃じゃない？

■ 発光くらいしてもいいんだよ？

■ 熱い展開くれてもいいんだよ？

——渴望していたそれは——

「誓いを此処に。」

—— 我は常世総ての善と成る者、

—— 我は常世総ての悪を敷しくものッ！」

.....  
ああ、心の底では分かっていたさ。

でも、この願いだけは捨てきれないんだよッ！

—— 直ぐに定義を失った ——

「—— 汝ッ！、三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ —— ツ！」

.....  
静寂の中で、雄太は虚しさと恥ずかしさから涙を流し崩れ落ちる。

分かっていただき、ああ、自分がおかしいことくらい。  
▪▪▪ これで捨てよう。これで諦めよう。

——それでもと——

もう、無理なんだよう  
▪▪▪。

——『奇跡には代償が必要だ』——

ピシッ

「ええ？」

前方から何かにヒビが入ったような音がした。  
そちらに涙で腫れた顔を向ける。  
そこには

「エクス  
カリバー」

？

そう、あらかじめ触媒として突き立てておいたエクスカリバーのレプリカに突如としてヒビが入ったのだ。

「なん・・・で、・・・どうして・・・ッ!？」  
カーンッ

瞬間、エクスカリバーが「割れた」。

そう、突如としてヒビが入ったと思えばそこを起点に真つ二つに割れたのだ。全く状況が理解できなかつたが、その次の瞬間・・・

ゴウッ!

「うおッ!?!」

一陣の風とともに魔法陣に青の光が走った。

一体何がどうやったら血が光るのか、全く分からないが、とにかく一陣の風とともに光ったのだ。

光ったったら光つのだッ！！！！！！！！

幻想じゃないッ！！

夢じゃないッ！！！！！！

その瞬間、彼は歓喜した。

まさか、本当になるとは！！

普通、こんな所をほかの人間が見たら真っ先に逃げるか気絶するだろう。人間は理解不能なものと瞬間的な驚きには弱い。

だが、先程述べたように彼は現在厨二病を再発している。

そう、今の彼は「現実と空想の区別がつかない」のだ。





彼を、飲み込んだ。

チュン、チュン

「うせやん」

彼が目を覚ましたのは、知らない森の中だった。

## 第2話 森の逃走劇の末に

「ブムオオオオオオオオ！」

「ギヤアアアアア！やめろおおお！こつち来んなあああああッ  
!!!!!!」

今、俺は牛のようなイノシシのようなよく分からない生物に追いかけてます。

■ ■  
いや、ちよつとした出来心やったんやねん。

いきなりどこも知れぬ森の中に放り出されてさ、

肝心のアルトリアはどこにもおらんしさ、

水はないわ食料はないわ情報もないわでむしゃくしやるやん。

それでさ、蹴ったんよ。「木」を。

.....  
そしたら、なんかコイツが落ちてきた。

.....  
訳が分からん！

何故あんな所にこんな巨体があつて木は折れない!? しかもなんで俺の振動にすらならない威力の蹴りでこんな巨体が落ちてきてんだよ!?

完全に物理法則適応外だよな!?

俺はすぐ逃げ出した。だが、こいつ、むつちや追いかけてくる。しかもこれが速いのなんの.....

.....  
F村先生のマジでお陀仏5秒前を体感したわ.....

まあ、そんなこんなで逃げている訳だがこいつは鼻もいい。

見た目からして鼻がでかいのでそうだろうとは思ったが、完全な死角に隠れている俺を普通に見つけ出した。

今はただひたすらに逃げているが、ちよつとまずいかもしれない。

バキバキバキイ！

「だから着いてくんなって言ってるんだろア！」

後ろから、周りの木々をなぎ倒しながら突き進む獣の音がする。

「ちよつとこれはマジでやばいってツン？」

そこで、前方から水の音がした。

もしかしたらこの先に川かなにかがあるのかもしれない。

「しめたッ！川に入れば匂いは辿れないはずだッ！」



後ろから迫り来る獣の足音、こうなったら一かバチかだッ!!

「ええい、ままよッ!!」

バシヤンッ!

彼は、急流の中にその身を投じた。

しかし、急流のせいで口の中に無理やり水をねじ込められ息が出来ない状態になっていた。

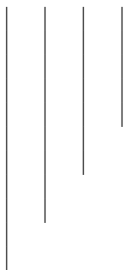
酸素が脳に届かず、少しづつ意識が薄れていく。

そんな中で

「ブムオオオオオオオオオオ!!!」

獲物を失って怒り狂っている獣の声を聴きながら、内心で「ざまあみろ」と呟いた

.....



「プファツ.....  
!?!? はア.....  
..... はア.....  
..... なんとか.....  
..... なったか.....」

その後、雄太は幾度となく溺れかけながらもなんとか酸素を補給しながら流れの緩やかなところで陸地に上がった。

「つぶねえ、あと少しで濡れるとこだった。」

だが、体はびしやびしやに濡れてしまいこのままでは風邪を引いてしまう。

「へっ。ヘクチツ！あゝ、寒いなあ。お、あそこ良さそうだな。」

前方に光が射し込んでいる場所があつた。

あそこで服を乾かそうと思ひ近づいて服を脱いだところで、ある違和感に気づいた。

.....  
木の影に誰かいる。

少し鎧のようなものが見えることから、きつと騎士とか兵士とかだろう。

まさかとは思っていたが、多分ここ中世だな。これで確信した。

少しづつ近づいてみる。

「す、すいません。」



言葉をかけるが全く反応はない。

まあ日本語で話しかけているんだから日本人じゃない限り「どうしましたか？」とは帰ってこないだろうが、それにしたってなんらかの反応があるはずだ。

寝ているのだろうか？

そして、木の裏に回ってみると

■ ■ ■ ■

「ツ!?う、うわあああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

驚いて腰を抜かした。

そこに居たのは鎧を着た白骨の遺体だった。

まさかこんな目にあうとは

■ ■ ■ ■

ここにきてどんだけ驚かされなくちゃならんのやら

いや、まじで、ホラー耐性ないんつすよ俺

すぐにも逃げ出したかったが、腰が抜けてしまって動けない。

少しづつ冷静になっていく。

逆に腰が抜けてよかったのかもしれない。あのまま勢いで走り出していたらまた変な獣とかち合う可能性が高かった。

「し・死んでるよな」

近づいてみると、その全貌が見えた。

鎧を着た死体は見た感じ男だろう。もちろん女性用の胸の装甲がないからだ!!

——まあ、そんなことはどうでもいいのだが、その遺体は両手に何かを持っていた。

それは、黄金に輝く杯と布に包まれて穂先だけでている真つ赤な槍だった。

ん？杯か。

さつき川に流されてた時に水が溢れるほど入ってきたが、そのせいで咳き込んでしま  
い喉が痛んでいるからちよつと水飲むか。

そう思つて手を合わせてからその杯を死体の手から奪つた。

死んでしまったこの人には申し訳ないが、生きている俺にはこれらが必要なのだ。  
物も使わないよりも使われた方が喜ぶだろう。

が、ガバツと来んなよ。フラグじゃねえからなツ!!

「すいません。使わさせていただきます。」

ついでに反対側の槍にも手を伸ばす。

リーチが長いからきつと、さつきのような獣が出ても牽制程度には使えるだろう。

それに、なんか血で汚れているようなのでついでに水で洗い流そう。

鎧を取るのには流石に躊躇われた。

俺自身あまり積極的に死体には触りたくない。

そして、その手から槍を取った瞬間

ゴトツ

「ヒッ!!」

なにかが鎧の隙間から落ちてきた。

び、びびってねえし!

——それは、本のようにだった。

だが、その表紙には少なくとも血痕が着いていたりところどころ破れたりしてボロボロである。

そして、それにはペンのようなものが付いていた。

これは、この人の日記か何かなのだろうか?

水で濡れては行けないから、後で読んでみよう。  
川で杯に水を入れる。

汚れてないかを見てみると、透き通った綺麗な水だった。

しかし、なにかキラキラした小さな粒が見えるが、砂利かなにかだろうか？  
まあ、この程度なら問題ないだろう。

杯を口につけて傾ける。

「んくっ、んくっ、っあく。なにこれうまつ！」

口に入ってきた水は今まで味わったことの無いほど透き通ったものだった。  
喉越しは良く、臭みも何も無い。すごく美味しい水だった。

だが、次の瞬間

.....

「ッ  
バゴンッ!!??」

体が、内側から爆発した。

### 第3話 死と奇跡の境界線

——体が、内側から、爆発した。

文字にするのは簡単だが、実際にその光景を思い浮かべることができることは中々に難しいことだろう。

だがそれは、錯覚でもなんでもなく実際に爆発したのだ。

それを認識した時点で、上半身と下半身がさよならしていた。

しかし、その時に感じるはずの痛みは一切なかった。

しかも、爆発した箇所は血が出ておらず、代わりにそこから光の粒がたくさん溢れており、ただ暖かい。







彼はその穂先を引っつかみ、一気に布から引き出した。

それは、穂先から取ってまでが真っ赤に染った槍だった。

構造は螺旋状になっており中心部が少しだけ螺旋が綻び膨らんでいる。一見するだけで見惚れるような美しい槍だった。

だが、今の彼にはそんなこと一切関係ない。

とにかく逃げたい一心で、その槍を杖の代わりにしてそこから逃げる。

ただ、「死にたくない」と唱えながら

・ ・ ・

---

---

---

---

やがて、さっきの白骨の死体場所まで戻ってきた。そこで、彼は下半身の違和感に気づいた。

下半身？

「え、なんでッ!？」

そう、後ろを見るとそこには下半身があった。

きちんと腰とくつついており、感覚もある。

「は、はあ!？」

そんな馬鹿なと雄太は思ったが、やはり確信を得るためでも何となくさっきの場所に  
戻るのには怖かった。

・・・少し考えてみる。

一体なぜあんなことになった？

水に毒でもあつたか？ いや、そんなものがあつたら川に投げ込んだ時点で死んでる。

ならば杯に毒でもあつたか？ 多分それはない。

杯にそんなものが塗つてあるなら目の前の兵士に下半身は無はずだ。

ならば本当に一体なんだつたんだ？

・・・少し怖いが、やはり行こう。

その後、杯を入念に調べたが結局何も無かった。  
更に水も、戦々恐々としながらももう一度飲んだ。  
結果はもちろん変化なし。ただの美味しい水だった。

だが、杯で飲んだ方が美味しかったような

まあ、それは気の持ちようだろう。

1番無さそうだが、あれは夢だったのか？

いや、あれだけ鮮明に見てんだまさか夢オチなわけではないだろう。

だが、そこに居ても何も解決しないので槍を洗って先の場所に戻った。

ちなみに槍は洗っても洗っても穂先のこびり付いた血は取れなかった

服はまだ乾きそうにないから木の枝に掛けておいた。

流石にパンツは履くが。

さて、少し腰を落ち着けたところで先程の本を開いた。

その時に思ったのだが、本の文字が日本語になっている。

中世に日本語なんてあるわけないだろう。

多分だが、思うにこれはあの魔法陣の効果だと思う。

Fate 作品では召喚されたアルトリア・ペンドラゴンはブリテンの王にも関わらず召喚された瞬間から日本語を話していた。

ということはあるを通る際、<sup>?</sup>ある程度の言語変換能力が着くようになるのだろう。

「ガ・ギャ・ギャ・ラハッド」

表紙には薄れた文字でそう書かれていた。

「聖杯探求日記」

なんだろう、名前ギヤラハットどっかで聞いたような  
もう1ページめくった所でそれが誰か気づいた。  
そこにはこう書かれていた。

ああー、やっぱりな。

F<sup>運</sup>  
a  
t<sup>命</sup>  
e  
だ。

これ

## 第4話 最優の騎士と聖遺物

まさか。この人がかのギヤラハッド卿だとは。

かつて最優の騎士と言われアーサー王から聖杯探求を命じられた三人の聖杯の騎士の一人。湖の騎士ランスロットとペレス王の娘エイレンとの間に産まれた息子。

その最後は聖杯探求の末、自ら聖杯に祈り、天上の世界へ身を移したと言われている。え？まさかだだけ。

先程の杯を手取る。

その輝きは黄金のそれ、縁ぶちには様々な装飾があしらわれている。

一見するだけで業物だとわかる。

「まさかだけど、これって聖杯？」

その言葉を呟いた瞬間、

「うおっまぶしっ！」



いきなり聖杯が輝き出した。

一瞬視界が潰れたが、もう一度目を開けると

「あれ？」

先程まで持っていた聖杯が消失していた。

「え？なんで？聖杯は!？」

すると、今度は眩いた瞬間

「うえッ!?!なんで!?!」

俺の胸から聖杯（仮）が出てきた。

は!?!なんで!?!聖杯ナンド!?!理解が追いつかねえよ!!

これってイリヤみたいに俺も小聖杯になったのか!? それともどこぞのワカメみたい  
に聖杯の依り代になるのか!? そんなの嫌だっぺ!!

——ちよつ、ちよつと待て。もちつけ俺。

よく、考えろ。

もし、聖杯の依り代になったならすぐにも効果が現れるはずだ。だが、特に体に変  
はないしその予兆もない。

寿命は分らんが減ることは無いだろう。だって俺ホムンクルスじゃないし。

それに、まず「この<sup>ァ</sup>世<sup>ン</sup>全<sup>リ</sup>ての<sup>マ</sup>悪<sup>ユ</sup>」による汚染なんてある訳では無いしな。

ってことはなんで俺の中に入ったんだ?

確か、アイリスフィールも似たようなことになっていたが、あれは聖杯が自身の身を  
守るための盾、器が必要だったからである。

俺は武術も剣技も何も無い。なぜ入ったんだ?

まさか、あれか?

聖杯で水飲んだ時に聖杯の魔力と同質化したとかそんな感じか？

てか、よく考えると下半身が爆発したのってまさか

まあ、いいや。

それを今考えても意味は無い。

あと、「聖杯」と唱えようと体に入ったり出たりするようだ。

聖杯を体に収めると、本の続きを読む。

そこには旅の記録とともに仲間たちとの約束事が書かれていた。

そして、表紙の裏には多分血文字であろう赤い字で「必ずアーサー王に聖杯を届ける」と書いてあった。

きつといつでも目的を見失わないという彼の強い決意表明だったんだろう。

その冒険日記は意外と面白かった、というかよくよく考えるとこれって聖遺物だよな？

まあ今は目的のページを探そう。

最後のあたりに目的のページである武器にと聖杯について書かれたページを見つけた。

そこには、ギヤラハットの代名詞である盾や選定の剣についてとあの赤い槍や聖杯について書かれていた。

なかなかわかりやすく書かれていた。

というか、俺の認識の仕方がFateに出てくる英霊の使う技＝宝具だとおもっていたから表示の仕方がFGOの宝具ステータスのそれになっていた。

マジでわかりやすく要点だけ書かれていた。

——結論から言おう。

あの赤い槍、「ロンギヌスの槍」はガチチート武器だった。

だってあれ1本に宝具が5つ、しかもそのうち宝具ランクEXの宝具が2つ、更に宝

具ランクが???って測定不能のEXですらない明らかにヤバそうなものが1つあるんだぜ。

馬鹿じゃねえの!?

宝具の定義って英霊の逸話とかその最後の再現だよな!?

エクスカリバーだって、Fate/Zeroで明かされたようにあの神造兵装の剣だけではなく「セイバーの両手」があって初めて再現できるものなんだから、剣だけではただの強大な力を持った聖遺物だ。

例外であるアヴァロンも、アルトリアがいなくてもその効果を発揮するが、あれは元々の聖遺物としての効果がそうであって、しかも内蔵されている宝具はもちろん1つだ。

———ということとはなぜか?

それはきつとこの槍の持ち主だったロンギヌスという男の逸話よりもこの槍の逸話の方が数多く残っているからだろう。

きつと、英霊として召喚される時、槍が本体でその担い手はただのおまけとして判断されるのではないか、とギヤラハッドさんの日記に書いてあった。

——わきやわからん。

なんだ？ ナーサリーライムみたいなもんなのか？

あと、この槍はかの騎士王、アルトリア・ペンドラゴンが持っている聖槍「ロンゴミニアド」の兄弟槍だそうだ。

なんでも、「天から降ってきた巨大な白銀の金属の塊を様々な手法で加工していき、結果として出来た二本の槍の一本」だそうだ。

その2本の槍は、根源を同じくして両極の性質を持っていたそうだが、先に出来たロングヌスの槍にはある欠陥があり、その性質の発動が極めて難しかった。

その欠陥を補いつつ更にいい出来にしようとしてできたものがロンゴミニアドだそうだ。

しかし、そのロングヌスの槍の本来の性質が一体なんなのかは書かれていなかった。

日記曰く、「神子の血を浴びた瞬間、その血に含まれた圧倒的な力に槍の自体の性質が上塗りされて本来の性質が判別不能になるほどまったく異質なナニカに変化してしまった」からだそうだ。

その時、元々白銀と金の2つの煌びやかな装飾であしらわれていた槍も今のよう  
に真つ赤に染まってしまったようだ。

まあそりゃ世界征服できるわ。ヒトラーも欲しがるわけだ。

たぶん、聖杯は俺がこの槍の担い手になったから自身の身を守る器として俺の事  
を選んだのだろう。

それで、聖杯についても書かれていた。

この聖杯は予想した通り、最後の晩餐にて用いられ、神子の血を受けた正真正銘本物  
の聖杯で間違いなかった。

俺の知っている聖杯は第3魔法の再現が可能だが、この聖杯は第3魔法を含め第1  
第6魔法まで全て、それに加え実質使用不可能だが《権能》が使用出来るそうだ。

え？ 権能ってあれでしょ？

物理法則が出来る以前に世界にあつた理でしょ？

確か世界を作りうる力があるとか

.....

え？何それ？青子様も苦笑いじゃん。

でか、抑止力の排斥対象じゃん。

しかし、この聖杯にはある絶対の聖約がある。

それは、「聖杯自身が、所有者を選びその所有者のみ聖杯の使用が可能」というものだ。更に、この聖杯はオリジナルの物なので聖杯戦争における1度だけ願いを叶えられる聖杯のそれとは違い、「内蔵魔力が続く限り、何度でもあらゆる願いを叶える」というものだった。

バカじゃねえの!?

え？つまり願いによって消費する魔力の量は変わるけど充電すればいつでも何度でも使用可能って事？

魔力さえあれば面倒な手法なんかは全部聖杯の方で処理して結果だけ残すってこと!?

エネオーブかよ。



しかも、俺聖杯に認められるようなこと一切していないんだが。

あれ？ちよつと待て。

聖杯に認められるようなことは何もしてないんだから聖杯に願いを言っても効果はないのでは？

試してみよう。

聖杯を体から出し、それを見る。

ちなみに、聖杯が体の中に入ったのは俺自身が聖杯と認識したからだ。

聖杯が黄金の輝きを放っているということはまだ聖杯に魔力残量があるという事だ。

それに向かって今一番叶えて欲しい願いを言う。

すなわち――

「ステーキ重出してくださいお願いします。」

重ねて言おう。この男アホである。

だが、この世界に來たあとというか來る前から何も食べていなかったの、少しでも何か食べたかった。

しかも、あの牛か何かよくわからん獣を見てからというものの、無性に肉が食いたくて堪らなかつたのだ!!

その瞬間、聖杯が輝きだし、目の前に豪華な弁当箱に入ったステーキ重が出てきた。

しかも想像した通りの。

「うひよおおおお!!!え!?!マジで!?!聖杯マジデ!?!」

直ぐに口の中に掻きこみたくなつたが、そこで箸がないことに気づく。

「あ、箸もお願いします。」

すると、ポトリと上から箸が落ちてきた。

「やったぜ！いただきまーす!!!」

雄太は一気にステーキ重を口の中に掻きこんだ。

うわあ、美味しいよ  
あの市販のペラツペラのステーキじゃなくて普通に厚みがある本物のステーキだよ

ていうか出来たてみたいにホカホカだ。

その後、味が足りないので塩コショウまで出して残った肉にかけて食べた。

これは第3魔法の「形而上の存在を汲み上げ、物質に転換する」という性質によって、俺の願いを物質に変換した結果だ。

だが、忘れてはならない。どんなにくだらない事でもそれは魔法を使用して得た結果であり、魔法を使った以上、それに合う『莫大な魔力』を対価として差し出さなければ



「注意・聖杯がまだ魔力を蓄えてる時に、聖杯を使って飲み物を飲んでではならない。イエス以外の人間がこれを使って何かを飲むと、聖杯内部の莫大な魔力がその飲み物の中に溶けだし、それを飲んだが最後、莫大な魔力に体が耐えられず体がエーテルへと変換されて空気中に爆散する。」

たどえ英雄や神族でも四肢の爆散は免れない。

更に、傷口から徐々にエーテルへと変換されて行くので、即座に処置をしなければ最悪体の一部が欠落してしまう。」

うわあ、何やってんねん俺。

マジかよ、じゃあ俺の下半身は今頃魔術の元になってるってこと？

ないわー、マジないわー。  
俺ってアホの子だったんだな。

——てかこれ、俺が生き残れたのってほんとに奇跡じゃん。

下半身とバイバイした後、すぐさまロンギヌスの槍を掴んでいなければ俺は死んでいた。  
た。

いや、消滅していたと言った方が正しいのか。

俺が消滅しなかったのは、先程述べたロンギヌスの槍のEXのランクを持つ宝具の1つ、「纏うは不滅なる神子の血」のおかげだ。

これは、槍の所有者に対して神子イエスの血を纏わせて、実質の不老不死の再現が可能となる宝具だ。

ただ、この時にも問題があつて、もし俺が聖杯で水を飲む前にロンギヌスの槍をあの手から出して触っていたら、「怒れる聖母の嘆き」という強大な呪いで槍に殺されていた。

槍も聖杯と同じく自身を振るうに値する人間にのみその身を任せる。

もし、それ以外の自分を振るうに値しないと判断された人間が触ると、不敬とされて天誅として呪い殺される。

もちろん、俺は槍術なんて知らないし、槍なんて初めて持った。そんな俺は完璧に天誅の対象だったはずだ。

しかし、俺はあの時聖杯の莫大な魔力をその身に秘めていた。自身がエーテルへと変換されるほど純粹な魔力を

その魔力量が自身を振るい、自身の能力の解放に値すると判断されて槍に認められたのだ。

もし、俺があの時槍を持って行っていなければ、もし、あの時俺が先に槍を洗っていたら

・・・考えるだけでゾツとする。

まあしかし、そんなこんなで情報が入ったことだし、武器もこの上ないものが手に入った。

見上げると、空はすっかり夕暮れになっていた。

今日はここで寝よう。

夕暮れの中で聖杯に「布団を出してくれ」と願うと、羽毛布団が目の前に出現した。

幸い、この辺りはあまり変な獣は居ないようだが、一応槍の怒れる聖母バージマリアの嘆きによって知性の低い獣は、そもそも槍には近づけないようになっていそうなので、安心だろう。

明日は、ギヤラハツドの日記に書かれてあった地図にそって歩き始めようと思う。

最終目標はもちろん俺の嫁であるアルトリア・ペンドラゴンと会うことだ。

モノホンがいるこの世界だが、ギヤラハツドが死んでるといふことは物語は終盤に差し掛かっていると考えていいだろう。

だが、俺はアルトリアを救うって決めただ。



早くブリテンに着こうと決意して、俺は布団に潜った。

——が、まったく寝付けぬ気配がなく、仕方が無いので聖杯で酒でも飲もうと、立ち上がり現在に至る。

「ういっく！ギャラハツドさくん、俺大丈夫ですよねえ。ちゃんと上手く行きますよねえ？」

もちろん遺体は喋らない。だが、きっと彼ならば「上手くいくように信じている」とも言うのではないだろうか？

そう、きっと上手くいくさ。

彼は常時ポケットに入れて持ち歩いていたアルトリアのキーホルダーを眺めながら今度こそ眠りに着いた。

——そのキーホルダーが一波乱起こすのはもう少し先のお話。

……そして、彼の理想の騎士王像が音を立って崩れるのは、明日のお話



## 宝具・聖杯の設定

### ロンギヌスの槍

騎士王アルトリア・ペンドラゴンの持つロンゴミニアドと時を同じくして空から降ってきた白銀の金属から作られた聖槍。

その根源はロンゴミニアドと同一のものだが、その性質は全く異なるものとなっている。

ただ、その性質は扱いが難しく実用性に欠けたためその反省を活かして作られたのが兄弟槍であるロンゴミニアドだ。

しかし、神子イエス・キリストの血を浴びた今その性質は本来のそれとは全く違う異質なナニカへと変化してしまった。

2つの槍は根源が同質のため、持ち主がいる場合、互いに共振をする。

宝具（※物語の都合上説明を伏せさせて頂く場合があります。）

「ロ神子スの血ト浴ロびンし終極キの槍ヌ」

ランク：EX

レンジ：1

最大補足：1柱

説明：???

種類：対神宝具

「<sup>ワ</sup>踊り<sup>ル</sup>狂<sup>ツ</sup>う不滅の槍」

ランク：B＋～A＋＋

レンジ：1～999

種類：対軍宝具

最大補足：1～???(所有者の魔力量に依存する)

説明：神子の血を受けたその槍はその圧倒的な再生力と異質な魔力で自身の身をプ  
ナリアの如く増やし、担い手(持ち主)の意志にそって自立戦闘が可能となった。

また、この時の性能や増える本数は所有者の魔力量によって変化する。

この時、本体の槍はその性能を著しく低下させている状態で、常時発動状態の  
「<sup>ブ</sup>纏<sup>ラ</sup>うは<sup>ド</sup>不滅なる<sup>ド</sup>神子の<sup>オ</sup>血<sup>ブ</sup>」と「<sup>エ</sup>与<sup>タ</sup>えるは<sup>ニ</sup>悠久なる<sup>テ</sup>傷跡<sup>イ</sup>」以外の宝具や効果の発動がで  
ない状態になる。

まだ、増えた槍にも微力ながら上記の2つの宝具の効果が付与されていてなかなか折

れることも、傷つくことも無く、増えた槍に付けられた傷は上位の魔法薬以外では回復が不可能となる。また、これらの効果の質や持続性時間も魔力量に依存している。

「纏ブうラはド不滅トなるオ神子ブのマ血リ」  
ア

ランク：EX

種類：対人（自身） 宝具

レンジ：0

最大補足：1人（自身）

説明：神子であるイエス・キリストの血を担い手に纏わせることで、あらゆる傷を癒しそれを常時纏っているため事実上の不老不死が可能となる。更に、この効果は事象に對しても有効である。（※簡単に言えば完全吸血鬼状態のありやりやぎ君。）

また、他者に血を垂らす事によって不老不死の効果は得られないがあらゆる傷を治すことができる。

アルトリア・ペンドラゴンの持つ「全て遠き理想郷」とは違い、傷は受けるがその後の超再生によってダメージ無しという扱いになる。体を吹っ飛ばしても塵一つ残さなほどのダメージを与えても、残滓魔力が1粒でもあればそこから復活出来る。しかも、攻撃を受けている間も回復し続けるので、まず、体が吹っ飛ぶなんてことは無い。

「与えるは悠久なる傷跡」

ランク：B

種類：对人宝具

レンジ：1

最大補足：1

説明：槍が持つ不滅の呪い。ロンギヌスの槍で付けられた傷は「纏うは不滅なる神子の血」以外で治すことは出来ず、永遠にその痛みを受け続ける。「必滅の黄薔薇」とほぼ同じ効果であるが、この呪いは例え担い手が死のうと、何らかの手段で槍を破壊しようとして、解除は出来ない。

解除するには、担い手に纏うは不滅なる神子の血を使用して回復してもらうしかないのだ。

「顕現せしは救済の御手」

ランク：???

種類：对罪（原罪）宝具・救済宝具

レンジ：999999

最大補足：???

——それは、聖杯の魔力の残滓が残ったキリストの血を浴びて槍に吸収されたあの第3魔法発動のトリガー。

かの者が死ぬ時、かの者が願い、出来上がった第3魔法の内容は、  
「原罪からの救済」

人々の絶対にして永遠の願い。原初にして最大の望み。

そうして生まれたそれは窮極の救済<sup>あがな</sup>宝具。

自らの身を犠牲にして人類の罪を贖<sup>あがな</sup>ったイエス・キリストをこの世界に留める最後にして最大の逸話。

そして、その光景を作り出したイエス・キリストですらあまりの悲しみと哀れみに涙した概念事象。

——エデンの園への片道切符。

聖杯との並列運用で行使可能。

聖杯

第1号聖杯。原初の聖杯。

神子イエス・キリストの血を受けた、最高位の聖遺物。

????????????????  
———  
曰く、その槍は最奥にて眠り、星と人とをを繋ぎ留める。それは、星の中核に  
最も迫る一本の杭、もしくはは星の概念そのもの———



聖杯とされる候補はこれより以前にも存在するが、聖堂教会はこれを原初の1番と定めそれから古い順に番号付けを行った。ギルガメッシュの持つウルクの大杯がそのひとつ、とうかが聖杯番号2番だ。(冬木の聖杯は第七百二十六号聖杯とされている)

それは、イエス・キリストが最後の晩餐にて使用し、後にその血を受けたものとされているただの黄金の杯だ。

しかし、イエス・キリストの血を受け、聖遺物化したことにより大量の魔力がその杯へと注がれ、神の使うある権能の使用すら可能となった。

しかし、権能を使うには聖杯が自壊するほどの魔力行使が必要となり、さらにその魔力量は神クラスの物が必要となるため実質使えるのは各魔法のみである。

それが「願いを叶える」という物に昇華され、現在に至る。

しかし、第6魔法、第5魔法、第4魔法、第1魔法など、担い手である雄太自身が知らず、詳細が明らかになっていないものは使用することが出来ない。

だが、聖杯に『その詳細について教えろ』と願えば、第3魔法が発動し、星幽界からそれに関する知識を引っ張ってくるため、遠回りにはなるが使用可能。

だが、魔法とはひとつにつき1人しか使い手として認められないため、現在はいないが未来に魔法の使用者が現れた場合は使用権限が優先されるためその魔法は使えなくなる。(例としては、キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグが未来で第2魔法を手に入

した瞬間、聖杯を持ってしても使用権限が所有者に優先されるため使えない。

また、この聖杯は魔力が続く限り所有者の願いを叶え続ける。

しかし、願いによつては消費する魔力が大きくなるし、雄太がやっていた「酒」や「ステーキ重」などの「物質創造」は第3魔法を用い、無から有を作り出すという権能1歩手前のことをしているため、相当な魔力消費がされている。

簡単に言えば、1個値段100円のお菓子をわざわざクレイゲームで30億円使つて取るほどの無駄なのだ。

しかし、いくら聖杯の元の魔力容量が多いからと言つて既にギアラハッドが「天界への旅」という壮大な願いを叶えたあとなのだ。その願いを叶えた後に、第3魔法をポンポン使っている。

聖杯自身が第2魔法を行使して別空間から魔力を少量ずつ汲み上げていても流石に限度があるため、今現在は魔力欠乏状態にある。

宿主として雄太を選んだのは聖杯とロンギヌスの槍がキリストの血を通してある程度のリンクをしているため、ロンギヌスの槍が認めたならば、自身を守る器になり得るだろうと認識し、宿主を彼に設定した。

また、所有者として認識したのは「聖杯で飲み物を飲む」という行為そのものがそも

そもそも不可能な事のため、それが聖杯の試練の代わりになった。

## 第5話 希望と美しい旅立ち

.....  
夢を見た。

まず、自身の体に雷が落ちた。

痛みは一切無いが、体の隅々にその雷が回り体中に小さな穴を開けた。

そこから、黄金の光が俺の中に入ってくる。

入ってきた光は、体中に開けられた穴を通り、体を循環して行く。

それはまるで、陽だまりの中に落ちたかのように暖かく、そして美しかった。

すると、体の中にだんだんと活力が湧いたきた、と思ったら、体全体が書き換えられ

ていくような感覚を覚えた。

隅々まで至った黄金の光が循環している場所から染みだし、内蔵から骨に至るまでそ

れが染み込んでいく感覚。

そして、ついには光は溢れ出し、

溢れ出した光は繭のように俺を包み込んだ。

.....  
その中はただ暖かく、安らぎを与えた

『ねえ  
?????  
人間は凄いのよ!!  
』

—— 酷く、懐かしさを感じる声を聞いた ——

「ふあゝ。よく寝たわゝ。」

1日寝たら流石に体も軽いわゝ。

.....  
あれ、軽すぎね？

まあ、いつかあゝ、多分昨日走り回り過ぎて相当疲労が溜まってたんだろな。

「んゝ、顔でも洗うか。」

そう言つて立ち上がり、川の方へと行く。

「あ、布団どうしよ。」

立ち上がったのはいいが、この森の中に布団なんて明らかに不自然だ。

てか、なんで布団にしたんだっけ？アウトドア用の寝袋の方が良かったんじゃね？

.....  
なんか寝返り打つたんびに草が入ってきてすげーチクチクしたし

.....  
今度からは寝袋にしよ。

「ん、でも布団どうしよあ、」

こんな時の聖杯じゃなイカ!! (Theダメ人間!!)

「おっしや!」

掛け声とともに聖杯を体から出そうとする。

すると、俺の胸がほわつと輝いて  
今にも消えそうな透明の杯が出てきた。

「え?」

つとお これ大丈夫?

明らかにはやばそうだけど





すると、体に入ってきた途端、なんとなくなのだが、聖杯の現状が分かった。

「魔力不足か」

つぶねえ！初期の内からこれ無くしたらハードモードまっしぐらだぞ！

良かったあ、とりあえず無くなりはしなかった。

まあ、魔力不足ということはまた魔力を再充填すれば

あれ？

魔力ってどうやって補充するんだっけ

うわあああああ

!!!!!!

お先真つ暗だアアアアアア

!!!!!!!

ヤバいって！これ無いと俺生きていけないよオ！（薬物乱用者みたいなこと言うな）

ん？

何か違和感が

魔法が少し少し増えてる!?  
うえ!?なんで!?魔法ナンデ!?

これ、自然に空気中の魔力を吸い込んでるのかなあ

あ、なんかそんな感じっぽい。

んー？それと。これはどっからか分からんが、他にも魔力供給源が、あるような。

まあ、どっちにしても。

良かったアアア！

なんか、水族館の巨大水槽に1滴ずつ水が入っていく感じしか感じられないけど、少しずつが増えてる。

なーんか微妙だなあ。

それにしてもなんで聖杯のことが分かるようになったんだ？

わからん。



えーっと、何これ？ 一体全体何がどうなったらこうなるの？

てか、金髪金目になってかつこよくはなつたけど  
もともと日本人特有の平たい顔にこの色って

おっそろしく似合わねえな !!

てかまじでどうしてこうなったよ！

まあ、思いつくのは1つしかないが。

多分これも聖杯だろう。

どこのワカメみたいに聖杯の器として体をより強固なものに作り替えたのだろう。

んで、その際に別に急ぐ必要はないし聖杯の汚染も無いから原型を留めたまま肉体を



「しゃーない、水で腹をたぷんたぷんにするか」とりあえず空腹は水で紛らわせる。

ごキュツ！ごキュツ！ごキュツ！

うっ、歩く度にお腹の中の水が揺れて気持ち悪っ！

「うっふう。さてと、日記ではお？」

早速地図を見ようと日記を取り上げるが、その時にまだ見れていなかった日記の最後のページに挟まっていた何かが落ちてきた。

「ん？なんだこりゃ 手紙か 『親愛なる我が王と父に捧ぐ』？」

えつと これは俺が見ても大丈夫な奴だろうか？

封に入れてある訳でもなく、ただ折りたたまれた紙だから、開けば見れるのだが

「ま、気になるんだし、是非もないよネ★」

何度でも言おう。この男、ア（ry

そして、内容を見て すぐさま泣いてしまった。



「うつ、ううううう。泣かせてくれるじゃねえか。」

そこには、本と同じように血と火によつて焦げた黒い部分のせいで読めないところも多々あつたが、だいたいこう書かれていた

まず初めに王への謝罪が書かれていた。

『誠に申し訳ございません、王よ。先に旅立つことをお許しください。あなたの命に逆らい、この聖杯を届けられなかったことを心より謝罪致します。』と。

そこから、王に対するこれまでの感謝やこの旅で感じたことなどが全て書かれていた。

そして、最後の辺りは父であるランスロット卿に当てられた文面があつた。

『最後に、我が父ランスロット卿へ。あなたは知らないでしょうが、息子である私が、先に旅立つことをどうかお許し下さい。私の産まれ方はどうであれ、私は卿の息子であることに誇りを持っています。どうかこの先、同じ過ちを繰り返さないでください。そし

てどうか、幸せになって下さい。』  
そう、締めくくられていた。

「うっ、うううう！おもはずないじまつだじやねえがよオ！（訳思わず泣いちまつたじやねえかよオ！）」

.....  
三度言おう。この男（ry

まあ、これは単に感受性が強いだけだが。

「ううう……ズズツ……これは、絶対に届けてやらねえとな！」

旅に、第1の目標が出来た。

「俺は絶対！アーサー王に会うぞおおおおお！！！！」  
天を仰ぎながら、彼は決意を口にした。

——うっ！

「ヴェエエエエエエエエエエエ！！！」

びちやつ！びちやびちやびちやつ！！

——なんとも閉まらない旅立ちである

第一章 旅の始まり、王への願い

第6話 第1村人はトラブルと共に

■ ■ ■

「い〜やつほおおおい!!!」

森の中に男の声が響き渡る。

その声とともに、一陣の風が通り過ぎ周りの葉を落とす。

この一陣の風となって魔物はびこる危険な森を叫びながら走るバカはもちろん雄太だ。

「まさか、魔力つてもんがここまで便利だとは思わなかったな！」

そう、彼はいわゆる魔力放出というものを使って爆発的な推進力を得ている。

それによって現在、普通の人の肉眼では視認不可能な程に加速している。

俺は今、一陣の風となっているッ!!!!!!

何故一般人の彼が魔力という代物を扱えるようになったのか。

それは1時間前に遡る。

「それにしても、ここに置きっぱなしって言うのは、なんか気が引けるなあ。」

雄太はギヤラハツドの遺体を前に悩んでいた。

出来ることならば、彼の遺体は彼の父であるランスロットの元に届けてやりたい。

だが、この遺体を持っていく方法も無いしもしかしたら俺みたいはこの人の残った鎧なんかを剥いでいく人もいるかもしれない。

「どうしたもんか・ん？」

そう言えばと思い、ギヤラハツドの日記のロンギヌスの槍の項目をもう一度見る。

「ん、これは出来るのか。」

そこには、ロンギヌスとロンゴミニアドの説明が書かれていた。

『聖槍ロンゴミニアドと聖槍ロンギヌス、2つの槍は根源を同じくしている。』

その根源とはすなわち、《人理の保存》この点は性質が変化してしまったロンギヌスも変わらず持つものだ。

ロンゴミニアドは人の《魂の保存》。そしてロンギヌスは人の《肉体の保存》を役割としている。』

確かに、FGOでも女神ロンゴミニアドから同じことが語られていた。

だが、なるほど。魂の器があるのだから、肉体の器もあつて然るべきなのか。

「う〜ん、肉体の保存って事は多分遺体も回収出来ると思うんだけどなあ、ロンゴミニアドってどうやって魂の保存とかしてたんだろう?」

「あとなんか『槍に選ばれる』とかなんとかあつた気がしたけど.....」

「.....とりあえず、槍を向けて.....《選定》とかなんとか唱えるのかな.....ってうおッ!」

《選定》と言った瞬間、槍の中間部にある螺旋が綻びて膨らんでいる部分から光が溢れた。

そして、槍の先端の方からどんとどんと螺旋が解けていく。

まるで、花開くかのように.....

「え?!何このギミック聞いてないんですけど!!!」

そして、槍の中間部まで開くと、そこには虹色に光る玉が入っていた。

「うおっ！まぶしっ！」

そして、その光が遺体を照らすと遺体も虹色に発光しだした。

そして、遺体がだんだんと小さくなっていき、最終的には小さな光の玉となって槍の光に吸い込まれた。

「何この心霊現象。てかなんで人があんなに小さくなるんだよ！」

「どうかこれどうやって取り出すんだよ！」

「なんだ？今度は「出る」とでも唱えれば出るのか!？」

「とりあえず、出るッ!!!」

出ました。

入れる時は《選定》で出す時は《出ろ》ってなんか、曖昧だなあ。まあ、出す時はそういう意の言葉を言えば出るんだろう。入れる時だけ、槍が保存するに相応しいかを選定するのだろう。

「まあいい、深く考えたら負けだ。」

「そうして、旅の準備を終えた雄太は早速森から出ようと思っただが、よく考えたらここがどこかすら分かんねえ。」

「今まで衝撃の出来事が多すぎて全く気になしていなかったが、俺は今どこにいるからわからない。」

更に、地図にも現在地を指すマークみたいなものもない。

「どうしよ、詰んでるじゃん。」



「やばいな。聖杯は今使い物にならないし、この場所を知る術が全くない。だが、ここにも何も変わらないし。」

位置を知る手がかりと言え、太陽となんか昔ちらつと本で読んだ『木の切り口で方位が分かる』というそもそも現在地すら分からない今必要のない知識位だ。

「あーあ、川にどんぶらこ〜と流されて行った先で誰か拾ってくんないかなあ。」

川？

「そーだ！川にそつて歩けば、村かなにかあるかも知れない！」  
確かに、昔は水道管も洗濯機もない時代。

人間が川の近くに集落を作るのは当たり前だろう。

いつも考え無しの彼としてはいい考え方だと賞賛しよう。

.....  
場所がここではなければ  
.....

忘れてはならない。

この森は未だ神秘が色濃く残り、危険な魔物がはびこる人外魔境だ。  
そんな場所に住んでいる人間など、1人ともいないだろう。

「よし、出発だっ！」

だが、そんなことお構い無し。とかいうか考え無しに彼は進む。  
とりあえず、目先のものに走ってしまう。それが彼なのだ。

なぜなら彼は（ry

「それにしても体が軽い。」

今彼は川に沿って相当な速さで走っているが、いつまで経つてもまったく疲れない。しかも、体全体を駆け巡るように力が溢れて有り余っている。

「外見がこんだけ変わったってことは、内側も相当変わっているのか？」

思い出すのは聖杯を体にぶち込まれたワカメ。

あいつも、俺と同じように聖杯を体に入れられたことによつて肉体情報が著しく変化させられていた。

それ以外に変わったことといえば

「魔術回路か？」

聖杯の力によつてシンジには強制的に魔力回路が付与された。

その結果、あの穴を開けることに成功した。

ということは、俺も聖杯によつて魔術回路が付与されたつてことか？

「うーん、なんかそれっぽいものは感じられるんだけど、どうやって使うんだ？」

体に巡る力はあまりに違和感があるので、その存在をありありと感じることができ  
る。

アルトリアは《魔力放出》が凄かったが、魔力放出ねえ。

そうだなあ、放出つて付く位だから、この内側で循環しているものを外側に押し出す  
ようにイメージして。

ボンツ！



そんな所から落ちて人間が生きていられるわけではない。

しかも、落下地点には半径5メートルちよつとのクレーターが出来ていた。

ロンギヌスの槍が無ければ、普通に体がバラバラになってもおかしくない。

「なるほど、単に魔力を出すとこんなふうに爆発するのか。」

至る。  
そうして、足の部分の魔力回路だけを反転させて魔力放出が出来るようになり現在に至る。

だが実際、この方法は酷く非効率的である。

何故ならば、無色の魔力をそのまま出して推進力にしているからだ。

普通、魔術師が推進力を得るために使うのは身体強化の魔術か風の属性の魔法であ

る。

身体強化の魔術は遠坂凜の様に、体を強化して速く動くことができる。

また、風王結界イレシブルエテや、風王鉄槌ストライクエテが大気を操り風を巻き起こすことで様々なことが出来るように、風の属性の魔術もそのような系統のことが出来る。

しかし、風の属性は希少なもので青崎家の魔術ともされている。

それに対して、雄太がしているのはただの魔力放出だ。

魔力放出とは本来、魔力をジェット噴射の様にして一時的な推進力を得るものだ。しかも、他の魔術に比べてアホみたい燃費が悪い。

それがどれだけ無駄なことかと言うと、身体強化を使った時、1の魔力を使うとすると同じ力で魔力放出は50の魔力を使う。

つまり、約50倍無駄なのだ。

そりゃ、面倒な詠唱もなしで一気に魔力を放出するのだからこれくらいの燃費の悪さにも頷けるだろう。

だが、雄太はそれを諸共しない。

それは、聖杯によって作られた魔術回路の多さだ。

単純な魔術回路の数ならば、大英雄をも凌ぐだろう。

それ故に50倍の無駄だろうがなんだろうが力技でねじ伏せているのだ。

これを魔術師が見たならば（ry

そんなこんなで視認不可能な速さで走っている彼だが

「うーん、人影すらない。」

どんと川下に向かって走っているのだが、人っ子一人どころか足跡や切り株などの形跡すら見つからない。

もうそろそろ太陽は天頂を迎えるだろう。

「こりや、本格的に野宿も検討するか？」

などと思っていると



ドシンツドシンツドシンツ  
!!!!!!

なーんか、どっかで聞いたことある足音が

「ブモオオオオ  
!!!!!!!」

ウツソだろお前ツ  
!!!!!!!  
流石にストーカー  
!!!!!!  
!!!!!!  
!!!!!!

音のする方を見ると、昨日の奴の体に花が生えた色違いと

「ちよつと!!!しつこすぎるわよおおおおお！」

.....  
きた。  
.....  
なーんか、昨日の俺と似たようなこと言ってる緑色のフードを被った少女が走って

.....  
よし、逃げよ。

「あつ!!! すいませんッ!!!! そのお方、助けてくれませんかアアア!!!!」

とりあえず、昨日の奴が怒って追いかけてきたわけではなかった。

後ろから少女の声が聞こえてきたが、お構い無しだ。

全速前進! 全速前進! 全速前進 D A ★!!!!

「ちよつ!! 逃げんなあ!!!!!!」

お、女の子が声を荒らげるものではありません!!!!

(怯え)

ガシツ！

「.....  
え？」

「助けてくれませんか槍の騎士様？  
(怒り)」

ぎやあああああああああああ  
!!!



「こちらもお怒りでいらっしやるううう

!!!!!!!

「何したんだよッ!?」

「知らないっ!花畑の中に入ったらいきなり暴れ狂って出てきたのよッ!!!」

.....  
それ、絶対縄張りに入られたからお怒りになられたんだろ。

「ええい!クソめんどくせえ!!!」

俺はくるっと身を反転させて化け物に向き直る。

「毎日毎日お前みたいな奴に追いかけて回されんのはごめんなんだよ獣畜生がッ!!!!!!牛なら牛らしく食肉にでもなってるッ!!!!!!猪でも、食肉になれやあああ!!!!!!」

そう言つて、ロンギヌスの槍を構える。

そして、その槍を

「わ、ワルツ・オブ・ロンギヌス踊り狂う不滅の槍ツツツツツ  
!!!!!!」

投げることも構えて走り出す事もせず、ファン〇ル大先生に頼つた。

だつてしようがないじゃん!!いくらチート武器やらチートな肉体手に入れたつてあのクソでかい体に自分でどうこうすることなんて怖くて出来ねえよ!!!!!!

だが、そんな雄太の考えとは反対に、掲げたロンギヌスの槍からファンネもとい、口

槍の数は持ち主の意思か、槍自身で判断できる。

今回は、雄太が恐怖で思考放棄したので槍が自ら適正な本数を分離させ、無駄なく相手を殺す。

「うわッ！なんか出てきた！！！！」

横で雄太にすがりつく少女からも声上がる。

そして、分離した槍は空中で魔獣に狙いを定め

.....

ヒュッ

.....  
一瞬の出来事だった。

まず、4本の槍が相手の足の全てを地面に縫いつけた。



次に、動けなくなった魔獣は怒りで雄叫びを上げようとしたが、その瞬間に最後の槍がその頭蓋に突き刺さり叫び声を上げることなく絶命した。

かろうじて、雄太はこの一瞬を理解することが出来た。

だが、はたから見たら一瞬すぎて何が起こったかすら理解できないだろう。

ほら、横の少女もぼけーっとしてる。

「ふいー、なんとかなったな。って、いつまで掴んでるの？というか君誰？」

「あ。た、助けていただきありがとうございます騎士様!!このご恩は忘れません!  
ではお元気で!!」

なんちゅー手のひら返しからの逃走。  
いつそ惚れ惚れするわ。



「なによお!!もうお礼言つたんだからいいじゃない!!私は急がなくちやいけないの!!それとも何?あなたまさか私の体でお礼を・ってそんなこと考えてたのこのド変態!!」  
 「だからちよつと落ち着けッ!!!俺は一言もそんなこと言つてないし思つてもいない!!変な濡れ衣を着せるな!!!」

「証拠は?」

「お前みたいなお子ちゃ「フンッ!!」イテテテッ!!!こらっ!!!脇腹をつねるなこの野郎ッ!!!」

「いきなり人をお子ちゃま呼ばわりする人には当然の報いよ。まあ、遺憾だけどあなたが私に対して変な欲情をしてないことは分かったわ。」

「そうかい、そりや良かった。ところで、君の住んでる場所まで案内して欲しいんだけど。」

「え?や、やつぱり私の体目当てなのねこの変態!!」

「だから違うって!!!今日泊まる場所がないから紹介してくれないかってこと!!!」

「え?ああ、そういうこと。それなら、私の村に来たら食料は自分でどうにかしなくちゃだけど、泊まるだけなら場所はあるわよ。」

「そうか。案内してくれないか？それと、俺の名前は.....  
ここで、言い淀む。」

俺の名前は明らかにブリテンには相応しくない名前だろう。発音なんかも全然違うし。

そうすると、いつもゲームで使ってるあっちでいいか。

「俺の名前はガレウスだ。」

この名前は、俺がかっこいいと思った円卓の騎士達の名前を重ねて作ったゲームネームだ。

「いいわよ！よろしくねガレウス！私の名前はリンネイルよ。気軽にリンって呼んでいいわ。」

緑色のフードを取ったそこには、どっかの赤色の悪魔さんの色違いさんがいた。

これが、はた迷惑な第一村人との会合であった。

## 第7話 大禁樹の森

「ところで、リンはなんでこの森に来たの?」

俺は、10歳くらいの幼い遠坂 凛似の翠目茶髪の少女リンネイルに先程狩った魔獣を解体しながら問いかける。

この解体方法はリンネイルが持っていた本を参考にした。

「知りたい?」

うっわ、すげーニマニマしながら聞いてくるよこの子。

「知りたい知りたい。どうか教えてくださいリンネイル様。」

「ふふん!そこまで言われたら仕方ないわね。私はこれを探してたのよ!」

そして、リンは得意げな顔をして持っていたカゴから何の変哲もない1本の草を取り出した。

「それは？」

「これはね、知る人ぞ知る伝説の靈草、『黄金草』よ!!」

うわー、なんとありふれたネーミング。

しかもどこも黄金じゃないんだが

「あなた今こう思ったでしょ、『あれ？黄金草なのに黄金じゃない？』ってね!!」

「口に出してたか？」

「顔に書いてあったわよ。」

俺の顔ってそんなに分かりやすかったか

「私も最初はそう思ったわ。でもね、これは黄金と同じ価値。いや、黄金よりも価値があるものだから、貴重という意味で名づけられたのよ。」

「ふーん、そんなに凄いものなのか？」

「聞いて驚きなさい！これはね、煎じて飲むだけでどんな病気でも治るのよ!!!」

「なんだ、ただの仙豆か。」

「あれ？仙豆は怪我だけだっけ？」

「あれ？あんまり驚かないのね。」

「俺も似たようなもん知ってるから。」

「え!?! そうなの!?!」

「まあ、その話は置いてほんとにそれが黄金草なのか？俺には周りに生えてる草と何ら変わらないように映るんだが。」

「そんなわけないじゃない。あ、これ私にしか見えないんだった。」

「ん? どうゆうこと?」

「えつとね、私は他の人には見えない《何か》が見えるの。それは、いろんな形をしてるね。この草には周りに赤と白と青と緑と黄色の玉がくつついてるように見えるの。そ



れが、私の黄金草の見分け方ね。」

「え？他の人には見えない何かって何？」

「そんなの私も知らないわよ。私が宙に浮いてる玉を見て『あれ何？』って聞いても他の人には一切見えないから変な子扱いされたし。でも、この玉を使ったら面白いことが出来るの！」

そう言うと、彼女は手を広げて何かを念じるように目を瞑る。

すると、その瞬間

「え!?!水!?!」

彼女の手から水が出てきた。

「今のはね、さつき言ってた玉の中から青色の玉だけを集めるの。それをひとつにまとめていくと膨らんだ玉が耐えきれなくなつて破裂した時に水が出て来るのよ。どう？凄いでしょ!?!」

「いや、凄いやかなんというか。」

「それって、魔術だよな？」

「マジユツ？それって確か、マーリン様が使ってる不思議な力のことよね？え！この力が魔術なの！？」

え！逆にならなくてたのかよすげえな！

「えーつと、多分そうだと思うけど、それって他にも何か出来るのか？」

「確か、赤色の玉を集めたら炎が出てきて、黄色の玉を集めたら、どこからともなく土が出てきたわ。それから、緑色の玉を集めるとさつきみたいにもものすごく速く動けるの。あと白色の玉は集めても何も起こらなかったわ。」

「ん？さつきみたいにつて？」

「……さつきあなたに逃げ出そうとした時よ。」

あ、その時か。

わ、分かったからそんなジト目で言わないでくれ。

・というか、今の話を聞いた限りだとその玉っていうのは多分五大元素のことかな？

本来、魔術回路を通して魔術を発動する時に属性を持たせるものだが、

自然に発生するものなのか？それとも、この場所がおかしいだけか？

よく分からんが、ひとつ分かったことがある。

この子、『アベレージ五大元素使い』じゃん。

いや、すげえな！

こんなとこまでそっくりかよ！！！！

え？なに？遠坂家ってブリテンと繋がりでもあったの！？

そんなわけないよね！？

これ、ほんとに偶然なのか？

「どうしたの？ぽけーつと黙り込んで？」

「あつ、いや、なんでもないなんでもない。」

「ふーん。まあ、いいけど。手を動かさないと目がくれちゃうわよ？」

いつの間にかジト目から普通の顔に戻っていたリンに聞く。

「なあ、その玉が見えるようになった時の状況ってどうだった？」

「?なんでそんなこと聞くの?」

「いや、俺にも見えるかなあーって。」

魔術に関しては少しでもおさえておきたい。

多分、方法さえ分かれば魔術関連の場合受け継いだ力とか何とかでない限り見えると思う。

自分でいうのもなんだが、この体基本的にチートスペックだし。

「そんなこと聞いても無駄だと思っけど。まあ、いいわ。確か。昔、私が一人でこの《大禁樹の森》に来た時になぜかモヤみたいなのがずっと視界の端に写っててそれがすごく気になって、目を凝らしていたらいつの間にか普段から見えるようになったの。」

ふむ、元々この子は魔術に適性があったからそのような魔術の素?が見えていたんだろう。

それか、自分でも気づかないうちに魔力を目に集めていたとかか?

■ ■ ■  
なるほど、目を凝らす  
■ ■ ■

俺は直ぐに、リンの持っていた黄金草を目を凝らして見る。

それと同時に、体の中の魔力を徐々に目に集めていく。

流石に、さつき手に入れた魔術回路を思うように動かすことは出来ないが、時間を掛けて何とかやって行く。

すると、なんだか分からんが確かにさつきまでとは違い、様々な色のモヤが見え始めた。

「あく、確かになんかモヤみたいなのがみえるわ。」

「え!!うそっ!?!ほんとに!?!」

だが、それ以上は形がはつきりしない。

■ ■ ■ 今のところは、これが限界か。

「ああ、なんかその草を覆うように色んな光が見えた。」

「うそ、ほんとにみえてるのね。へえ〜」

「ああ、ってどうした？ そんなに嬉しそうな顔して？」

「う、嬉しそうな顔なんてしてないわよッ!!!」

「そう言つてフシャアーツ!!!と怒る彼女だが、確かにさつき嬉しそうな顔をしていた。」

「一体なんなんだ？」

「？まあいいが、解体とりあえず終わったぞ。食える肉は結構あるな。」

解体し終わった肉を見たせいで、朝から何も食べていないお腹が飯をよこせと訴えてくる。

だいたい60キログラムほど。

普通の牛の方がもつと取れるし、素人がやったせいで相当無駄な部分もある。

だが、もともとの魔獣の体内は臭みが強く食べれる部位が少ないそうだ。

それを考慮すると、まあまあ上手くできた方では無いだろうか？

「ありがとう。じゃあ袋に入れておいて。」

そう言つて、リンは持っていたカゴの中から麻袋のような乾燥した草で編んでいる折りたたんだ袋を取り出して俺に渡す。

「よつと・あ、やつぱ軽いな。」

普通、60キロの物を持つたら相当力まなければいけないが体が改変されたおかげで片手でも十分軽い。

「それじゃあ、刺しておいた槍を回収してと。」

オリジナルの槍に『分体を戻せ』と魔力を込めながら命令すると、直ぐに刺さつていた槍はその影を薄くしていきオリジナルの元へひとりで近づくと、重なり合う様にして1本の槍へと戻つた。

「ねえ、さつきも思つただけけれど、あなたのその槍つてどうなつてるのかしら？」  
「うーん、まあ君の魔術と同じようなもんだ。」

と、適当にはぐらかしておく。

「それってどこで見つけたの？」

「これは幸運な拾い物だ。」

そう。本当に単なる偶然の賜物だ。

▪ ▪ ▪  
ただ、ここまで上手くいっていると思うと何かの『力』が働いているように思えてならない。

なぜ、俺はこの槍と巡り会えた？

なぜ、俺は聖杯なんて歴史上の大遺物を手に入れることが出来た？

なぜ、幸運の連続がこうも多く続いた？

▪ ▪ ▪  
いや、そもそもなぜ俺はこんな時代に転移ないしはタイムスリップ出来た？

時空間の移動なんてどうやって出来た？

こんなの、まるでF・G・Oのアン・サ・モン・プ・ロ・グ・ラムみたいなじゃないか。



今まで困難の連続で、考える暇などなかったが考える余裕ができた途端、次から次に様々な疑問が生まれて来る。

だが

「よし、じゃあ行くこうぜ。」

未だに、困難の最中だし、何も解決していない。

目の前の困難が多すぎるのだから、考えるのはこれを潰した後だ。

「あ、そうね！私の家はこっちよ、着いてきて。」

そう言つてリンネイルは座っていた岩から降りて、笑顔で俺の手を引いた。

「そう言えば、なんでリンは黄金草が必要なんだ？家族か親友が病気なのか？」

そう言えばまだ、なぜリンが黄金草を必要としているのかを聞いていなかった。

急いでいるとか何とか言っていたので、結構急を要するのか？

「……ええ、妹が1人いてね、その子がずっと熱を出していてそれが下がらないのよ……」

苦虫を噛み潰したような顔をする。

「それに、なんだか髪が抜けたり何も無いところでよろけたりして、今はずっと家で寝込んでるの。」

お・おお

そ、想像以上にやばそうだなそりや

「ん？ちよつと待てよ？親はどうしたんだ？そんだけいろいろ続いてたら流石に対処のひとつや2つ取ってるだろ。」

「私達の家は親なんて居ないわよ？もう戦いで死んでるわ。」

リンは何でもないことを言うような顔であっさりと言った。

は？

この子は一体何を言っているんだ？

親が、戦いで、死んだ。

まさか、この子はそんな事をこんなにもあつさり言つてのけているのか？

「す、済まなかった。随分とあつさり言つてのけるんだな。」

「はあ？ 当たり前でしょ？ 戦える男達は戦場へ行つて妻は支えるのが仕事、子供の私達はなるべく被害が出ないように戦えない老人たちや農家の人達に引き取られる。私達はたまたま運が良かったから、今は何不自由なく暮らせているけど戦線に近いところはそれはそれは酷いらしいわよ？」

……ははッ

………親が居ないことが当たり前と来た……

………これが、この時代にとっての常識なのか………

「………なあ、親がいなくて悲しいと思うことはあるか………？」

「え、まあ、たまに思うわ。もしも親がいればもつと暮らしが楽になるとはね。」

それは、断じて寂しきなんかではない。

ただ、『もつと生活が楽になったのに』という効率だけを求めた結果論だ。

そんなもの、人間が親族に対して抱いていい感情では無い。

それは、ただの『機械』を求めていることと何ら変わらない。

だが、悲しいかな彼女はそもそも『親から子への愛』すら知らないと言うだろう。

しかも、周りに子供がいたとしてもきつと状況は同じ。

ただ、『明日を生きる』ために足掻いている。

それが、どれほど悲しい生き方なのか、知らない彼女には分からないだろう

いや、結局これは部外者の自分の尺度で彼女を測っているだけだ。

何も知らないくせに、俺は彼女に自分の持論を押し付けようとしているのか

「ねえ、どうしたの？急に黙り込んで。」

「いや、なんでもない。」  
隣を歩く彼女の目を見て言う。

「そうだ。俺は知らなければならぬ。  
この時代のことを。この時代に生きる人々のことを。」

「ふーん、じゃあ今度は私から質問ね。ガレウスはどこから来たの？旅の人って言うだけだ。」

彼女の質問に頭を捻る。



「ああ、美味しいぞ。俺が好きだったのはマグロとサーモンだな。」

今の魚の名前なんて知らんし、普通に俺が好きだった魚の名前を適当に列挙する。

・やべ、思い出したら普通に食いたくなってきた。

「まぐろ？ さあもん？ 本でもそんな魚は見たことないけど。」

「ああ、現地の方言みたいなものだ。お？ なんだありや？」

適当に魚の話題をはぐらかしていると、目の前の木々によつて塞がれていた視界が晴れると、遠くに100メートルを優に超え、雲すらも切り裂く巨木が立っていた。

「あれが『大禁樹』よ。あなた、あれを見に来るためにここに来てたんじゃないの？」

あれか。

いや、大禁樹の森、なんて言うんだからそれらしいものはあるとは思っていたが、  
カすぎね？  
.....デ

あー、ダメだわ。ここで物理法則をどうこう説く方がアホらしいや。



「いや、ここには成り行きで来ただけだ。」

「ふーん。あ、もうそろそろ村に着くわ。」

こつちよ、と走っていく彼女につられて走り出す。前に、日記を取り出す。

あんなクソでかい目印があるんだ。流石に描かれているだろうと思い、地図のページから大禁樹を探す。

「えーつとお。おお、あったあった。やっとこれで地図が使えるな。」

ようやく、川下りから解放されたガレウスはそのままリンに着いていき

「着いたわ。」

目の前に、小さな村が現れた。

「ここが私たちの村、メルガルダよ。」

そこには、明らかに貧困に喘いでいる痩せた土地の村があった。

## 第8話　メルガルダの村にて

「・・・そう言えば、その妹さん以外にも誰かいるのか？」

村に入ったあと、脇道に入って人目に入らないようにと前を歩くリンに尋ねる。

「いえ。おじいさんがいたけど、その人も私たちに自分の畑を残して2年前に亡くなつたわ。今いるのは、私と病気の妹だけよ。」

その年で大人がいない環境でよく生きられるな。とは言えなかった。

その環境に慣れなければ、彼女らが生き残ることは出来ないのだろうか・・・

「ただいまー、ブロウ、大丈夫？」

俺達は、村へ入ると直ぐに村の東端の家屋へ入った。

俺は、そのリンの妹が怖がらないように少し後ろを歩く。

中には、簡素ながらも清潔なベッドに頭に冷やすためのタオルのような物を付けて横たわった一人の少女がいた。

少女が、扉開けた音に反応しこちらに顔を向ける。

その顔は、少々やつれていて、髪も短髪になっており、目の色や髪の色などもリンの色そのままだったが……

……Fate／zeroの桜にそっくりだった。

……いや、なんでヤツ!?

まあね!?!リンの妹は桜であって然るべきなんだけどね!?

ここまで一緒とか……もう訳わからんわ……

なんなのさ!?!遠坂家はブリテン生まれの魔術師だったのかえ!?

「……あ、姉さ……コホッ!ケホッ!……おかえり……なさ……ゲホッ!ケホッ!……」  
ブロウと呼ばれた少女は姉を迎えるためにその体にムチを打って起き上がろうとする。

「ブ、ブロウ!!無理して起き上がらなくても大丈夫よ……」

それを見たリンはすぐにブロウをゆっくりと寝かせる。

「ゲホッ!……ごめんなさい……姉さん……まだ、体がだるくて……動けそうも……」  
「そう……でも、大丈夫よブロウ!!今日は凄いの持って来たんだから!」

ブロウは、その言葉を聞いて表情を驚かせた。

「持ってきたって．．．姉さ．．．ゲホツ!!．．．ん、また．．．森に入ったんですかッ!?」

「あ、あはは．．．」

どうやら、リンが森に入ったことを酷く心配しているようだ。

「なんでまた入ったんですかッ!!この前だってあんなに酷い怪我をして帰ってきたのにッ!!姉さんがいなくなったら．．．私．．．っ!ゲホツ!ゲホツ!!」

「ご、ごめんなさいブロウ．．．少し落ち着いて．．．でも、私は大丈夫だから．．．ここ、今回は、凄く助っ人もいたんだし!!」

「助っ人?．．．それは一体．．．」

リンは、俺にチョイチョイツと手を振ってこっちに来るように合図した。

「え．．．えつとお．．．ご紹介に預かりました、助っ人です．．．。」  
ちよつともじもじとしながらそう言った。

「え……あなたは何萎縮しちゃってんだよ!？」

「こらガレウス!あなた自己紹介くらいちゃんとしなさいよ!なんでそんな緊張してるのよ!!」

「いや、ほんとなんでだよツ!!リンの時は全然気にしなかったくせに、すぐえ緊張してるし!」

「……あ、よく考えたら俺、この1年間くらいずっとへこへこしてて、他人とまともな会話した事ねえわ(白目)」

リンは勢いで喋ってたけど、歳下にも腰が低くなりそうになるって、どんだけだよ……「はあ……まあブロウが可愛いのは分かるけど、そんなに緊張しなくてもいいのに……てか、なんで私の時はそんな反応しなかったのよ?まさか、魅力なかったとか!？」

「いや、リンも十分可愛いぞ?」

「そ、そう……ありがとう……(〃〃〃〃)」

「胸ないけ「フンっ!!」グファッ!!」

「一言多いのよ!まだ子供なんだから胸なんてあるわけないでしょツ!!これからもっと大きくなるのよっ!!」

グブオ・・・俺の・・・ゴールデン・・・が・・・ガクツ

「・・・・・・・・ふふつ・・・・・・・・姉さんと仲がいいんですね、助っ人さん？」

すると、さつきまで戸惑いと困惑の表情を浮かべていたプロウがこちらを向いて笑みを浮かべていた。

「ばっ！そ、そんなわけないでしょ!?私とこいつが仲良いだなんて・・・」

「はいはい、姉さん・・・ずっと私に付きつきりだったし、村では変な子扱いで、友達いなかったから、仲良くしてあげて下さいね?・・・えつと・・・ガレウスさん？」

「え・・・あ、はい。旅の者で、ガレウスと言います・・・」

「そんなに畏まらなくても・・・ゲホッ!・・・いいですよ。」

「あ・・・はい・・・じゃなくて・・・よ、よろしくな?プロウ?で良かったつけ?」

そう聞きながらリンの方を向く。

「・・・・・・・・この子の名前はプロウディアよ。プロウでもディアでも、好きに呼べば?」

素っ気なく返すリンの顔には、何か面白くなさそうなものを見たような表情が浮かん

でいた。

「?なんでそんなに拗ねてんだ?」

「別に!!拗ねてなんかないし!!」

またフシャーツ!!つと擬音が付きそうな表情で睨まれた。

照れたり怒ったり、忙しい奴だな。

その後、ブロウに自身の事情を話して俺がここに一晚泊してもらおうことを理解してもらった。

下手に反対されなくてほんとはよかった。

「・・・そうだリン、さっさとあの黄金草とかいう胡散臭い草で薬作ろうぜ?」

「胡散臭いって何よ!!・・・まあ、その前にブロウの体を拭かせて。ずっとベッドに入ってる汗をかいてるし、この子もこのままじゃ気持ち悪いでしょ?」

「そうか。・・・え?体を拭く?」

え?それって服脱ぐよね・・・

「そうよ?なんでそんなうろたえて・・・え・・・?」



途端に、怒りで熱を帯びていたリンの目が汚物を見るような目が変わった。

「嘘でしょ……ガレウスあなた、こんな年端もいかない女の子の体に欲じよ……」

「ワァーッ!!!ワァーッワァーッ!!そ、それ以上は言うなリンッ!!変な誤解を招くぞッ!!俺が好きなのは一人しかおらんのだじやい!!!んな幼い体見せられたって、別になんとも!!」

「じゃあ良いじゃない。わざわざ外に出なくても大丈夫よ?今のあなた、この辺じゃ珍しい格好してるから、下手に見られると周りの人に変な誤解を招くわ。」

表情を変えて、部屋の隅にでも座ってなさい、と言ってリンはタオルを取る。

リンは頭のタオルを取って、自分の手を置く。

「……うん。熱はだいぶ下がって来たわね。」

「あ……姉さんの手、冷たくて気持ちいい……」

.....

「じゃあ体を拭くわよ、と言って1度布団から体を起こし来ていた白い着物のようなどレスのような服を脱がせる。」

そこにあらわになったのは恐ろしいまでに白い肌だった。そして、お腹の辺りが少しむくんでいて、反対に胸の部分は胸骨が見えるほどガリガリだった。

・・・皮膚蒼白、浮腫、発育不良、脱力感・・・

俺は、仕事のために買った本の中で世界問題について取り上げられていた本を思い出した。

世界には今何が必要か。それを見極めるために買った本だが、この症状はその本で見ることがあった。

確か・・・

「・・・栄養失調症」

ボソリとそう呟いた。

そうだ。アフリカや中南米の子供たちが、これと全く同じ症状になっていた。

村の環境を見るに、近くの森には魔物がうじゃうじゃ。ということは農作物を育てるしか方法がなく、されど満足に農作物を育てることが出来ずに食物が一切手に入らないのだろう。

なるほど、発熱や咳は栄養失調による免疫低下によって引き起こされたものか。

「はい、終わったわよ。」

「ありがとうございます．．．姉さん．．．少し楽になりました．．．。」

にこりと力なく微笑むブロウだが、実際気分はどんどん悪くなっているだろう。

きつと、今までもリンは森に入っ様々な病気の治し方を試してきたのだろう。

だが、それは確かに免疫低下で発病した病には有効だっただろうが、根本的な解決にはならない。

だが、姉の努力を無駄にしたくなくてこの子は無理をしているのだろう。

．．．．．はあ、どうにか出来ないもんかなあ．．．

「よし、じゃあいよいよこれを使って．．．。」

「・・・リン、ちょっと待って。」

勢いよく黄金草を出そうとするリンに待ったをかける。

「な、なによ、神妙な顔して・・・」

「・・・残念だが、黄金草ではプロウは治せない。」

「・・・え？」

俺の言葉を聞いたリンはほうけた顔になって動かなくなった。

「ど、どうして!?黄金草があればどんな病だつて治せるのよ!?・・・まさか、まだ信じてないの!?!」

「いや、それが本当でも嘘でも、プロウの病気を治すことは出来ない。」

そこから、栄養失調症について簡単な説明をした。

それを聞く度に、だんだんとリンの顔から血の気が引いていく。

「・・・うそ・・・でしょ・・・じゃあ、私は・・・なんのために・・・」

「姉さん!!」

よろよろと力なくリンが床にへたりこんだ。

それを心配するようにブロウが姉の方に体を寄せようとする。

「・・・ブロウ・・・？・・・あなた・・・本当は私が持ってきた薬を飲んでも、ちつとも薬になつてなかつたの・・・？」

「ツ！そ、そんなことありま・・・ゴホツ！・・・せん確かに体が楽になりました！」

「ああ・・・確かに、引き起こされた別の病気はある程度治つたんだろうけど、それでも本当に少しだけ楽になつただけで、翌日にはもつと酷くなつていたんだろう？」

「そん・・・な・・・」

リンは更に落ち込んだ。

それを見たブロウは、俺の方にキツ！と力なく睨みを聞かせる。

そこには、余計なことを言うなという意味が込められているのだろう。

これ以上、姉に心配をかけたくないが故にこの子はいつもこうして自分で抱え込んできたのだろう。

本来なら、栄養失調症の患者は感情の起伏だつてほとんどないはずなのに。

・・・性格までそっくりだな。

だが、本当のことを言わなければいつまでも伝わらなかつただろう。そして、本当のことを知らないまま死んでしまえばここまで手を尽くしてずっと看病をしていたリンの方が辛くなるだけだ。

「ごめん．．．なさい．．．ブロウ．．．気づいて、あげられなかつた．．．」

リンはリンで、自分の苦勞が実は問題の解決になつておらず、ただ期限を先延ばしにしただけで、しかもそれにたいしてブロウが与えた笑顔と自分の達成感に満たされて本当のことが見えなかつた自分に責任を感じているのだろう。

「．．．ねえ．．．ガレウス．．．どうしたら、ブロウは治るの．．．？」

だが、さすがリン。決して泣くことだけはせず、今やるべき事を正確に行う。

「そうだな．．．リン？一宿一飯の恩って知つてるか？」

その言葉に、リンは少し考え込み首を振った。

「いえ．．．知らないわ。それが今関係あるの？」

「ああ。簡単に言えば一晩飯を食つて、家に泊めてもらうならば、その恩は返さなければならぬという事だ。」

「え?・・・まさか!」

リンは、目を大きく見開いて俺の方を見る。

「そういう事だ。俺が何とかしてやる。」

栄養失調症は、栄養が足りないのだから色々なものを食べさせれば良いじゃないかと思われがちだが、実際にそんなことをすれば大変なことになる。

栄養が足りていないということは、食糧を食べていないという事だ。

今まで何も食べていなかった胃に、いきなり固形物をつつ込むと、体が拒絶反応を起こして逆流する。

更に、口に食べ物を入れるだけでも消化器官中にカビが生えていたり、筋肉が萎縮したりしているから壮絶な痛みを伴う。

しかも、無事入ったとしても栄養を吸収する器官すら弱っているため、栄養を効率よく吸収することが出来ずそのままです。

そのため、有効な治療法はミルクなどに栄養分をふんだんに溶かした飲み物を飲ませるか、単純に点滴で栄養を血中にそのまま突っ込むかなどだ。

だが、こんな時代に点滴などないし、栄養をふんだんに含んだミルクなんてものもつと無い。

だが、俺には手段は関係なく、魔力対価さえ払えばノータイムで結果が帰ってくる万能の願望器がある。

．．．ならば、それを使うしかないのだが．．．

「．．．聖杯、か．．．」

出てきたのは、透明な杯の形をしたものだった。

この状態では、今すぐに集められるだけの魔力を集めたところで第3魔法の行使はまず無理だろう。

かと言って、魔力がなければ完治は不可能だ。

どうしたもんか．．．

「なあリン、さっき言ってたモヤが凄い濃い草ってあるか？」

俺が出した聖杯をじっと見つめていたリンに問う。



「え?・・・えつとたしか・・・」

そう言いながら、リンは部屋の奥にある柵の中から真つ黒なコケ?を取り出した。

「・・・この黒いコケがそうなのか?」

そう言うと、ブロウが不思議そうな顔をしてこちらを見る。

「黒?・・・ガレウスさん、私には緑にしか見えませんですけど・・・」

「え?何言ってるんだ?どう見ても黒じゃ・・・」

「いえ、緑で合ってるわ。」

俺が反対しようとする、リンがそう言った。

困惑する俺の顔をみて、リンが補足説明をする。

「これはね、《ニゴリゴケ》っていう魔物がほかの場所よりも多く集まる場所に生えてるコケで、魔物の死骸や分泌物によって集められたたくさんの栄養を吸って成長するの。その時に、魔物達が発したあの玉達が集まりすぎて、たくさん色が混ざり合い黒く見えるの。しかも、その濃度が濃すぎて目を凝らさなくても黒く見えてしまうの。」

・・・なるほど。純粋な魔力の集合体みたいなもんか。

確かに、黒い色をしているのかと思っただ、よく見ると細かく揺れていたのでモヤだ

とすることが分かった。

「・・・でも、なんでリンはこんなもの持ってたんだ？」

「実は、この力が手に入った時に、その不思議な力で何とかブロウを治せないかと思ったのだけど・・・さすがにこんな得体の知れない怪しいものを妹に渡すなんて出来るわけないわよ。」

なるほど。確かに、こんな怪しいコケを妹に渡そうとは思わないな。

だが、これで何とかなるかもしれない。

「じゃあ、これ貰ってもいいか？」

「いいけど、そんなのどうやって使うの？」

俺は、リンに貰ったニゴリゴケをそのまま口の中に放り込んだ。

・・・マツズ!!!

「・・・うえっ!?何してるのよあなたッ!?」

うえー・・・苦いしネチヨネチヨするし、ただただ生臭い。

あまりの不味さに吐きそうになったため、リンに飲み物を持ってくるようにジエスチャーをする。

それを理解したリンは、台所の水瓶から水を1杯木のコップに汲んできてくれた。それを手を伸ばして受け取り、即座に口に流し込む。

あー、まつずかったあ・・・もう絶対したくねえ・・・

・・・まあでも、無駄じゃ無さそうだな。

「ゲホッ!ゲホッ!・・・なあリン、ブロウのお腹が膨れ始めたのはいつ頃からだ?」  
「えつと・・・確か5ヶ月くらいだったと思うけど・・・」

多く見積つてほしい8か月前。

・・・なら、ギリギリ何とかなるか。

無理やり体に突っ込んだ魔力と、俺がさつき使った魔力放出の残った魔力を使い、それから・・・

「リン、少しお願いがあるんだが。」

「何?」

「今集められるだけの光の玉を全て集めてこの杯に突っ込んでくれないか?」

「・・・分かった。それでプロウが治るのね?」

少し考えたが、今は妹を優先しようだ。

「ああ、必ず直してみせる。」

リンは俺を信じてくれたのだから、何としてもそれに答えなくては行けない。

聖杯に、ありつただけの魔力をそそいで、更にリンからの補助も受けて何とか目標の魔力をためることが出来た。

これで、何とかなるだろう。

「我、聖杯に願う。」

一応、人前で使う時には儀礼には従っておく。

・・・そんな軽いノリで願い叶えてたらねえ・・・（今更かよ・・・）

そうして、俺は願いを言った。

途端に、それに呼応するように聖杯が輝き出しその輝きがブロウの体を包み込む。その光が高まっていき、その眩しさに耐えられずリンも俺も目を閉じた。

・・・そして、光が収まった時に目の前にいたのは・・・

「あ・・・あれ？・・・」

自分の体を起こして不思議そうにお腹や腕を見る血色のいい肌のブロウだった。

「良かった・・・」

そこまで見届けたところで、俺は意識を手放した。

この時、結局ガレウスは第3魔法の行使をすることが出来なかった。ガレウスの残りの全魔力とニゴリゴケのそれ、リンの集めた魔力を持ってしても、圧倒的に足りなかった。

では、何をしたのか？

答えは、《第2魔法による体内環境の逆行》だ。

第2魔法は、莫大な魔力やものすごい神経要する作業を経てやっと行える魔法だが、第3魔法に比べると圧倒的に消費魔力量が少ない。

しかも、聖杯を用いたことで面倒な作業は全てノータイムですつ飛ばし、ブロウの体内に発動場所を限定することでなんとか行使できた。

もともと、発育不良で成長も止まっていたためそこまで体格も変わらないだろう。

まあ、何とかなつて万々歳だ

戦いに  
を持ち込んではいけない。

仲間に  
を求めてはいけない。

家族に  
を願ってはいけない。

自分が  
のなら、それを受け入れよう。

他人が  
のなら、それを何の感慨もなく見つめよう。

そうして自身の??を??で覆い隠そう。

その足は数多あまたの戦場を超え、その身は数多の血を余すところなく浴び、その

目は数多の人の死を見つめ、その耳で数多の阿鼻叫喚を聞き、その手で数多の人間を殺し、その頭の中で人を効率的に殺す数多の戦略を編み出し……

……??でおおった??の中で、ただ、1人の男が??の海で泣いていた。

結局、男は選択を間違えたのだろうか？

結局、この世に???など無かったのだろうか？

男の瞳はいつしか視界を無くし、それでも戦場で培われ研ぎ澄まされた感覚によって磨かれた技は、戦場で若いものから年老いたものまで数多の血花を咲き誇らせた。

そうして歩き続けた男は、折れることをしなかった。

??で??をおおっていたから。

それでも、後悔も???も無くなるわけがなく、むしろ前に進む度に増えていくばかりだった。

周りの人が???だと讚えようと、???に階級を上げられようと、男はただ、何の感慨もなく結果だけを残した。

自分には許されず、他人に???を送られても全てが皮肉にしか感じられない。



1人をおおっす覚悟をしていた。

だが・・・本当にこれで良いのだろうか・・・。

最終的に男は、自身の存在意義さえ理解できなくなり、だが、それでも歩みを止めることはしなかった。

・・・出来なかった。

??で??をおおっていたから。

その男は、人よりも不器用だったために、こんなことしかできなかったのだ。

止まることは決して許されず、進むならば必ず大きな代償が必要な暗闇の道の果て  
で・・・

・  
・  
・  
だが、  
男は確かに  
・  
・

????  
を見た。

「・・・て、きてよ！ガレウスツ!!!」  
必死なリンの声に目を覚ます。

まず目に入ったのは、必死な形相のリンと、赤く染った空だった。

リンの必死な叫びの中に、聞き慣れない鳥の鳴き声が混ざっている。

自分の体を確認すると、さつきまでブロウが寝ていたベッドの上に寝ていることがわかった。

こんな大人の体を持ち上げるなんて、ブロウと協力していても結構大変な作業だっただろうに・・・

そう思うと、感謝よりも先にこんなに幼い子供たちに迷惑をかけたことに対する申し訳なさの方が先に込み上げてきた。

「ツ!!ガレウスツ!!目を覚ましたのね!!」

俺が目を覚ましたのを見て、リンの顔がぱつと明るくなった。

「ごめんな、リン・・・余計な心配かけた上に看病までしてもらって・・・それと、看病してくれてありがとう。」

「ほんとよ!!あなたが倒れた時、すつごく心配したんだからね!!しかも途中から凄くうなされてたみたいだし!!せつかくブロウを治してくれたのにあなたが倒れたら元も子も無いわよ!!・・・でも、私からもお礼を言わせて・・・ありがとう。あなたがいなかったら、ブロウも私も悲しいままお別れする所だったわ。」

リンとブロウにも相当心配を掛けてしまったようだ・・・。

それに、うなされていた？

・・・そう言えば、何か怖い夢を見ていたような・・・

・・・まあいつか、所詮夢は夢だし。

ん？そう言えばブロウの姿が見えないが・・・

「なあ、ブロウはどうしたんだ？」

「あの子は、今日あなたが狩ってきた魔牛の肉を焼くための薪を取りに行つて貰つてる

わ。病み上がりなんだし、もともと、体も弱いんだから私が行くって言ったのに、『姉さんはガレウスさんの看病をお願いします。』って、異論は認めないって言う顔で一点張りするもんだから、さすがに折れたのよ……」

あの子たまに私の言う事聞かないのよね……と疲れた顔で言った。

だが、俺の頭にはもうお肉のことしか無かった。

結局、昨日の夜にバカみたいに魔力を消費して行った1人宴会以降、なんにも食べていないので、お腹がペコペコなのだ。

「よっしゃ、じゃあリン、もう体は大丈夫だから俺もブロウのところに手伝いに行ってくるわ。今日の朝からなんにも食べていないからさすがに腹が減った。」

そう言って立ち上がると、リンも着いてくると言うので2人でブロウの元に向かった。

あまり俺も悪目立ちしたくないので、隠れながら家の合間を通っていた。すると……「ねえ、そろそろかしら……」「クソッ!!もう限界だって言うのにッ!!」「集められるも

んは全部かき集めて地下に隠せ!!急げッ!!」「女子供もなるべく見つからないようにしろよッ!!」

という声が周りから聞こえてきた。

近々この村で何か行われるのだろうか？

そのまま森の前まで行くと、そこには巻で組み立てられた山とそれをくみたてたであろうプロウがいた。

「あ、姉さん。それにガレウスさんも・・・よかった。目を覚まされたんですね。」

そうして、プロウもプロウでリンと同じようにお礼を口にした。

「本当にありがとうございます。・・・あの痛みの中で、しかも姉さんを置いて妹である私が先に死んでいくのは、さすがに耐えられませんでした。なにか、お礼が出来たらいいんですが・・・」

「ああ、いいよいいよお礼なんて。そんなことよりも早く肉焼こうぜ！もうお腹がやばいからさ……」

その言葉と同時に、キュルキュルとお腹がなった。

……だが、俺のお腹では無い。

ブロウも、そんな表情ではなかった。

ということは……

俺はリンの方を向く。

「な、なによつ!!悪い!?!」

そこには、顔を真っ赤にしたリンがいた。

そいえば、リンもお昼を食べていなかったな。

「はははっ！ほら、お姉さんの腹の虫も早くしろって急かしてるぞ？」  
「うるさいわね!!ほらっ！とつとと帰って食べちゃうわよ!!」

もう、リンの方も焦らされてなりふり構ってられないようだ。

「ふふ、そうですね。それじゃあ、早速焼いちゃいましょうか。」

「え？まさか、ここで焼くの？」

「はい、どうせなら私の回復祝いとガレウスさんへとの出会いを祝して、パーつとやっ  
ちやおうかかって思って・・・だめ、ですか？」

「いやいや、そんなことない！逆に今すぐにかぶりつきたいくらいだったからちようど  
いいよ！ありがとうブロウ。」

「そうね、ブロウ、気を利かせてくれてありがとう。」

早速、リンの力で火をおこしていつの間にか串に刺してあった魔牛の肉を炙る。



色合いは、少し紫がかった赤色でスジも多いが、この程度なら味付けでごまかせるだろう。

「よっし、ちょうどいい焼き加減だな！ほれリン、お先にどうぞ。」

「あ、ありがとう。でも、もっと加熱しないとお腹壊すわよ？」

「いんや、このくらいじゃないと固くなりすぎて美味しくなくなるんだ。それに、リンの方の肉は凄い火に近づけてるけど、そんなに近づけると焦げるぞ？」

火に近づけすぎている肉を遠くに置いて、焼けた肉をリンに渡すと、そのままかぶりついた。

「リン・・・お腹すいてるのは分かるけど味付けくらいしたらどうだ？さすがにそのままだと肉が臭いだろ？」

「え？そんなことないわよ？そのままでも普通に美味しいわ。久しぶりのお肉だもの。ほら、ブロウもどうぞ。」

「あ、ありがとうございます姉さん。．．．うん、姉さんの言う通り、そのままでも十分行けますよ?」

そうなのか? やつぱり魔牛<sup>まぎゅう</sup>って言うくらいだからこんな肉でも絶品なのか?  
焼けた肉を頬張る。

．．．．．不味い。控えめに言つて不味い。

いや、普通に肉が臭いよ!? しかも下準備に肉を叩いて焼いても普通に硬いよ!? 何!? 俺の味覚がおかしいのか!?

「．．．なあ、これ普通に生臭いぞ? しかも硬いし。．．．やつぱり味付けくらいしようぜ?」

「そう? 私は全然大丈夫だし、いつも食べてるお肉よりは柔らかいわ。それに味付けつ

て言っても今はそれらしいものなんて持ってないわ。」

ぬえっ!?!味付けが無いだとう!?!しかも、これより硬いもんたべてんのか!?!

そんなバナナ・・・俺、いくらお腹が空いてもさすがにこれは食えんぞ?

「あ、私一応持つてきましたよ?使いますか?」

お、おお、女神はここにいたのか・・・

「だ、大天使ブロウディア様、私に調味料を恵んでください!!」

「そ、そんなにおだてなくても・・・その、チヨウミリヨウ?が何かは知りませんが・・・はい、どうぞ。」

そうして差し出されたのは1粒の緑色の実だった。

・・・うえ?

「あれ？ガレウスこれ見るの初めてなんですか？」

俺の不思議そうな顔を見て、ブロウが補足説明をする。

「これはゴラの実っていう実で、食材にかけると甘みと少しの酸味が効いて美味しくなるんですよ。」

「……は、初めて知った……じゃあ、味付け頼んでもいいかな……？」

「あ、ちよつと待っててくださいね。」

そのままブロウはゴラの実？を手で握り潰して、出てきた汁を俺の肉の上にかけた。

ふ、不衛生だよお。

「はい、どうぞ。」

そうして渡された肉をさつきよりはマシになっていればいいなと言う期待とともに頬張った。

……まじゆい。非常にまじゆい。

なんだろう。臭い肉の上に、みかんの汁を掛けて食べてる感じ。

・・・余計気持ち悪くなってきた。

「ご、ごめんブロウ。普通の塩とかはないかな？」

「塩ってあなた、今そんなもの手に入るわけじゃないじゃない。それでなくても戦のせいで物流が滞ってるんだから。」

え？塩ないの？塩ないの!?

ふ、ふひっ、ふひひひ・・・

「ぬがーッ!!!もう我慢ならん!!!」

俺は、また美味しい肉にと取っておいたステーキ重に着いていた塩コショウの小袋を  
だした。

聖杯に頼んだ時、俺のステーキ重のイメージは弁当のようなものだった。

それを食べ終わる前に肉単体でも食べたいと思って聖杯に出してもらった塩コショ  
ウの残りを使う。

こんな、元から固くて臭い肉なんかじゃなくて、もつと上等な肉を食べる時に取って  
おいただが、このままでは俺の腹が死ぬ。

そして、それをふりかけて肉にかけてかぶりつく。

「むぐむぐ……んくっ!……まあ、多少はマシになったな。」

ついでに、塩コショウを不思議そうに見ていた2人の肉にも、残ったものをかける。

それを食べた2人は、大きく目を見開いて、一心不乱にかぶりついて行った。

ええ・・・たかが塩コシヨウだけでそこまでなるか・・・？

人は、本当に美味しいものを食べると言葉が出ないそうだが、それはどうやら本当のようだ。

食べ終わった2人は、名残惜しそうに串を見てから、こちらにぼつ！と顔を向けた。

「ねえガレウス？あなた、まださっきの持っていないの？」

「あの・・・すいません。私も、欲しいです・・・」

これそんなに量ないんだけどな・・・

・・・まあいつか、きつと旅の途中でコシヨウは手に入らなくても塩は手に入るだろう。

2人はここから動けないんだから、この場限りのものになるだろうし。

「……うん。いいよ。」

「ほんとっ! やった!」

「すいません、お礼をするのはこちらのはずなのに、本当にありがとうございます!」  
「いいって、俺の方はまだどうにかするし。」

そうして、みんなで楽しく肉を食べていた時だった……

……そういえば、イギリスって自他ともに認めるメシマズって聞いたけど、こんな時代からなのか? などと呑気なことを思っていると……

「みんなあああああ!!! 騎士達が来たぞオオオオおおおおおッ!!!」



・  
・  
・  
1人の村人、  
悲痛な叫び声  
が聞こえてきたのは  
・  
・

## 第9話 相容れぬ価値観

「おいおい、こりやなかなか熱烈な歓迎してくれるじゃねえか、ええ？まあ、最近はどこに行っても似たような反応されるけどよオ。」

村の前に現れたのは鉄製の甲冑をまとい、騎馬に乗った騎士達だった。

だが、その顔ぶれの多くには処理していない無精髭が生えていた。さらに、纏っている鎧も元は煌びやかな銀色だったのだろうが、今はくすんでいたり、ところどころへこんだりしており、その姿を見ると騎士と言うよりも賊の方が似合いそうな程だった。

その先頭に立つ男が甲冑の中からさつき叫んでいた男に語りかけている。

「す、すいません！」

「まあいい、んじやおめえ、村長呼んでこい。あと、厩舎はどこだ？」

「は、はいいい!!き、厩舎はあちらになりますっ!!」

男は、厩舎の場所を指さしたあと、そんちよーっ!!!とその場から逃げるように村長の家へと走っていった。

その後、騎士達は厩舎に馬を連れて行き、入り切らない何頭かは柱に手網を括りつけて最低限動かないようにしていた。

そして、年老いていながらも農業のおかげか足腰がすっかりとした老人がどつしりとした歩みで先程の男の前へと行き、膝をつく。

「騎士様方、遠路はるばるご苦労様です・・・」

「おう村長、また世話になるぜ。これが、今回必要になる物資のリストだ。」

そうして男が取り出した紙を村長は戦々恐々としながら受け取り、その内容を見た瞬間目を丸くさせ、怒りをあらわにした。

「これほどっ！これほど必要なのですか騎士様ツ!!今我々はもう自分達の方でさえこんなにはありません!!どうか、どうかご慈悲をツ!!」

「・・・はあく、つたくよオ。いつもこれだもんなあ・・・おい村長、こんだけなくて、あるもんは全部出せ。全てかき集めてここに持ってこさせろ。」

「そ、そんなっ!!あなたはあなたの方が守るべき民に死ねと言っているのですぞ!!そんな横暴が通っていいはずがない!!」

「ほう？それは我々騎士に対する反抗声明と受け取っていいのか？」

そこで、騎士は抜剣した。

「こつちも長旅で疲れも溜まつてるし腹も減つてんだよ。先に言っておくが、次の戦場はこの付近だ。この前蛮族共によつて占領されたこの村の隣の奪還作戦を執行する。これがどういう意味か分かるか？俺達が疲労や空腹で倒れたら、次に殺されるのはお前達だ。俺達を空腹にさせたまま戦わせてお前らが蛮族共に八つ裂きにされて死ぬか、それとも少しでも生きる希望を得るために俺達に物資を調達するか。どつちにするかなんて、聞くまでもないだろう？」

まあ、お前らがなんと言おうと俺達は勝手に物資を調達するがな、とつけ加えて老人に剣を突きつける。

「分かつたらさつさとよこせ。さもなくて貴様の四肢をもぎ、みせしめとして村の中央にでも飾つてやろう。．．．安心しろ、この前の時みたいにお前らの女子供には手を出しやしねえよ。ホントなら、今も隣の家の窓の隙間から覗いてるちようど食べ頃の女の体を貪り食いたいくらいだが．．．」

男がそう言つてゲスな笑みを浮かべると同時に、

「団長殿、そのような行動は控えて欲しい。それは王命に逆らう行為だ。」

どこからともなく、フードを目深にかぶつた騎士が男の前に現れ目にも止まらぬ速さで抜剣しその剣を男の首筋に当てる。

「・・・ほらな、なんでか知らんが旅の途中にこいつがいきなりやつて来て、『王命により、貴殿らの行動を監視させてもらう』なんつー訳の分からんことを抜かしやがった。いわく、俺達の団には問題行動が多すぎるために王から直属の監視を付けられたそうだ。全く、女漁りなんてどこの団でもやつてる事なのに、どこでハマしちまったんだか・・・」

そう言いながら、男は抜剣した剣を腰に戻した。

「だが、実力は相当なもんでな、こいつのせいで女遊びが出来なくなつてそれに対して不満に思つた1人がこいつを殺そうとしたんだが・・・自分でも訳が分からんうちにそいつは細切れにされたよ。躊躇なんてありやしなかつた。だから、俺たちやこいつの前ではいい子を演じなきゃならねえんだよ。」

そう言つて男は両手を上げた。すると、抜剣していた騎士も剣を鞘に収めて厩舎の方

へと歩いていった。

そして、団長と呼ばれた男は先程の光景に唾然としていた村長に向き直り、言葉を続ける。

「ま、村人に直接的な被害をもたらすことはしないと約束しよう。だが、お前達の方から反抗的な行動をした場合は……」

男は、一気にその目を鋭くさせ、

「……その者とその者の家族を問答無用で叩き斬る。こつちもさすがになりふり構ってられないのでな。」

そう言い残して自分の馬を厩舎に連れていった。

---

その様子を遠くからうかがっている影が3つ。

「・・・なあ、あれって騎士だよな？声でかいから多少は内容が分かったけど・・・ひでえ横暴だな。どう見てもあの村長を脅迫してるようにしか見えない。」

ガレウスは昼におこなった目に魔力を集めるという行為を少し変えて、それを目と耳に使用することで少しながらも会話を聞くことができていた。

「しまった・・・今日は色々なことがありすぎて、騎士達が来るのをうっかり忘れていたわ・・・」

はい、うっかり頂きましたツ!!

「・・・姉さん、またうっかりですか・・・」

またって!またって!?

「不味いわね、家の食料は一応バレないように隠してあるけど、私たちがいなくなったら他のものも荒らし放題されちゃうわ・・・」

「え!?!ちよつと待て、あいつら無断で家に上がり込んでくるのか!?!」

「そうよ、ほんつとに!こつちにとつてはいい迷惑なんだから!!」

ええ・・・マジか・・・

The 不法侵入じゃねえか・・・

なるほど、これが魔王討伐のためという免罪符を掲げ、他人の家に上がり込んで柵を漁り、壺を割るという行為を繰り返すゲームの勇者の実写版か。

俺もゲームではアイテムを取るためにそんな行為をしていてたが・・・なるほど、やられる側はこんなにも胸くそ悪いものなのか。

もし、またゲームをする機会があったら、ゲームの進行が出来なくても他人の家に上がり込むのはやめよう。

「あれ？なんか今、こっち向いたような・・・」

リンがそうつぶやく。

すると、リンが見ていた相手が複数人の仲間たちに話しかけている。

そして、それを見た団長がその会話の中に入っていった。

「一体、何を話しているんでしょうか・・・？」



「さあ？ おおかた、飯は何にするかとか話しているんじゃないのか？」  
すると、団長がこちらを向いた。

「なっ!?!」

「うそっ!?! なんで!?!」

「あ！ ね、姉さん！ け、煙!!!! お肉が放つたらかしにしてたせいで燃えて煙が出てます!!」  
「あっ!! お肉うううううう!!!!」

急いで、火が燃え移ってしまった肉に水をかけて消すが、もう原型も留めないほど丸焦げになってしまっていた。

「うわあああ、私のお肉があ．．．」

「ま、まあしょうがないよ。ほら、まだまだお代わりあるんだし．．．」

「もうおしまいよ．．．騎士達に見つかったら無理やり．．．」

「よオ……村のみんなは必死こいて食料隠してんのに、あんたらは呑気にわいわい野外パーティーかい？」

後ろを向くと、数百メートルは離れていたはずの場所にいた団長がいた。

「お？なんでこんなに速く距離を詰められたかわからんっていう顔だな。まあ、そいつは騎士の秘密つてやつだな。スマンが言うことは出来ん。……なあ、その肉、もちろん俺たちに渡してくれるよなあ？」

そう言つて、俺たちに対して手を差し出してきた。

「おいおい、人のもの横取りするなんて、今どきガキでもしねえぞ？」  
もちろん俺らは抵抗するで!!

内心ガツクガクだけど、なんとかそれを悟られないように隠す。

「あんなあ……」

そんな俺を、団長は底冷えする冷めた目で見つめてきた。

「俺ア言ったよなあ？反抗するならその家族もろとも斬るつてよオ。別に、お前が少し力があるからつて舐めてんのならいいけどよオ、そんなときや、その2人の首が飛ぶぞ？」

その言葉とその態度にあまりにも大きな憤りを感じた。

「さっきも俺たちの接近に気づいていなかったようだし、この距離ならお前が反応する前にこいつらをぶった斬ることが出来る。どうだ？それが嫌ならさっさと渡せ。」

「・・・なんで・・・」

「ああ!?まだ文句でもあんのか?」

「なんでそんな簡単に守るべき民を盾に取れるツ!?お前らおかしいんじゃないのかツ!?騎士っていうのは国民守る盾だろうが!それがこんな横暴して恐喝まがいのことして!情けねえとか思はねえのかよツ!!!」

思ったことが、口をついて出てくる。

俺のその言葉に、男は怒る……かと思えば、不思議そうな顔をしていた。

「ああ？何を今更……ちよつと待て、おめえどこの出身だ？」

団長は、俺の装いを見てこの辺りの人間じゃないことが分かったようだ。

もちろん、こんな暴漢共に教えるつもりはない。

「誰がお前らみたい奴に教えるかよ！」

「質問に答えないならば隣のガキの首を切る。」

即答だった。こいつは、一切の躊躇い無くリン達の命を取引材料に使った。

卑怯だ!!と言いたかったが、質問の答え以外の回答は認めないという目で睨みつけて来たため、仕方なくリンに教えた町を言った。

「……東端の港町だ……」

「東端の港町……確かあのあたりは、メルクスかヴィナバージか……なるほどなア……」

途端に男の目は睨みつけてくるような目から、嘲笑や侮蔑の籠もった眼差しに変わった。

「そりやあ分かるわけないわな・・・坊ちゃん？」

そして、俺の事を《坊ちゃん》と呼んだ。

「ツ!!なんでいきなりそんな呼び方なんだよ!!」

「そりやお前がこつちの事情も知らねえで首突つ込んできた坊ちゃんだからに決まってるだろうが!!」

そして、俺に諭すように、子供に丁寧に教えるように言った。

「お前はどうせなんにも知らないだろうから教えてやるよ。俺たちはお前らと違って毎日毎日が生きていくのに必死なんだよ。各地でもう10年も不毛が続き、明日生きていく食料も手に入れない。ガキは生まれた瞬間から苦痛を味わい、飢えに泣いては親を困らせる。そんなガキどもも、10年後生きてるのは2割も居ないだろうさ。騎士達は毎日死と隣り合わせの生活を送っているにも関わらず、支給されるものと比べればかの金とくつだらねえ名誉って言う名の枷だけだ。お前さんの所は畑がなくても水産資源で魚や塩がいつでも手に入って飢えることは滅多に無いらしいじゃねえか?そんなだからお前さんは地獄を超えてきた俺らにとって坊ちゃんなんだよ。」

実際にどうかは知らないが、この騎士達にとってはそういう認識なのだろう。だが、俺には一切関係ない。

「それでも!!いくらなんでも横暴がすぎるだろ!!お前はお前らが守るべき民に対してその地獄とやらを歩ませるようなこととしてんだぞ!!」

そう言うと、団長は呆れた目をしてガレウスを見る、

「あのなあ・・・さつきから俺達がやってる事が横暴だなんだって言ってるけどよ・・・流石に坊ちゃんのお前でも知ってるだろ?これは、アーサー王直々の王命だ。」

「・・・は?」

俺は、その男の言うことを理解することが出来なかった。

アーサー王・・・直々の命令・・・?

あ、アーサー王って・・・アルトリアだよ・・・？

アルトリアが・・・こ、こんなふざけたことを容認どころか自ら命令している・・・？

「いや、は？は？こっちのセリフだぞ？何ほうけた顔してんだよ・・・ああ、そういやお前んとこの領主イカレ野郎だったな。確か、アーサー王に心底酔心してるらしいじゃねえか。全く、このご時世そんなこと考えるなんて、狂人か色物かっての。」

なおほうけた顔をしている俺に、団長は続けて口にする。

「まあ、狂った領主にどんな教育受けさせられてきたのかは知らんが、アーサー王にとつて村の1つや2つ干上がらせるのは常道だ。」

・・・やめろ・・・

「酷いときやわざと敵を村に誘導して、相手が村の人間や物資に夢中ななっている所を後ろから奇襲、なんて作戦もあったな・・・本当に、アーサー王に人の気持ちは分からないとはよく言ったもんだよ。」

・・・やめて・・・くれ・・・!!

「ほんとに、『明日勝つための措置だ。皆耐えてくれ』なんて言われた日にや、明日勝つた後に一体何が残る、一体、いつまでその明日を続けにやならんと思つたな。・・・あれは断じて人ではない。国を守るだけのただの王という名の人形だ。」

彼女を・・・貶めるのは・・・やめて・・・くれ・・・

その言葉が、どうしても言えなかつた。

結局、何も知らない自分には本当に地獄とも言える場所をいくつも通つてきたこの人たちに口を出すことは出来なかつた。

当たり前だ。

何も知らない子供が、やれ税金を無くせだの物価を安くしろだのと言っているの何ら変わりない。

ただの子供の戯言だ。

そして、俺は何も言い返すことが出来ず口をただばくばくさせるだけだ。

「まあ、その人形さんのおかげで俺らも好き勝手させてもらつてるけどなあ。んじや、こいつは貰つていくぜ。」

「あ、そ、それは姉さんの・・・」



男が手に取ったのはリンがまだ焼いていたちようど食べ頃の肉だった。

「や、やめ……」

流石に子供のものに手を出させるのは容認出来ず、待ったをかけるが……

「いいの!!……騎士様、どうぞ全て持つて行つて下さい。私たちではとても食べきれそうにありませんでしたから……」

リンは逆に、差し出すようにまだ生だった肉塊も含め全部の肉を騎士達へと渡した。

「おお、そいつあ貰つてやらねえとな。良かったな、せつかく取つた獲物が無駄にならずに済んで。」

ガハハと笑いながら団長と騎士達が村の方へ戻っていく。

それを見送つたあと、リンが頭を下げてきた。

「ごめんなさい、ガレウス、ブロウ……あなた達の了承も無く勝手に渡してしまつて……」  
「姉さん……私は大丈夫ですよ。私たちのこと、守ろうとしてくれたんですよね？ガレウスさん、まだお腹空いてるでしょうけど、どうか姉さんを許してあげてください……」

「あ、ああ．．．あのままだったら俺もちょっと、自分を抑えられそうになかった．．．この中で一番年上のはずなのに．．．俺の方こそ、すまなかった。」

この中で一番年上だと言うのに、リンに止められるまで暴走していたと思うと、自分が情けない。

「でも、まだお腹すいてるわよね。ちよつと待ってね！騎士達が寝静まった後に隠して貯蔵庫あけるから。」

それじゃ、一旦帰りましょ？と言うリンに俺は、先に行っていてくれと言った。

「少し．．．頭を冷やしたい．．．1人してくれないか？」

リンもブロウも少し心配そうな顔をしたが、リンがわかった。じゃあ、私たちは先に行ってるから．．．あまり遅くならないでね、と言ってブロウも一緒に連れていってくれた。

突然だが、火はいいものだ。

見ているだけでも心が落ち着き、そのパチパチという音にはある程度のリラクゼーション効果があるとされている。

そして、ガレウスはさつきまで肉を焼いていた火を見ながら、先程の騎士達の言動を思い出す。

『アーサー王にとって村一つ干上がらせるのは常道。』

『酷いときには村の人間を巻き込んで囮にし、奇襲をしかける。』

『その全てが明日勝つための措置・・・見えない明日を掴むためのその場しのぎの連続』

・・・そんなことをして、一体なんの意味があるのだろうか？

それは、形だけの国を守っているだけであってその守られる対象に、国民は・・・真の国は入っていないではないか・・・

国とは、土地だけでなく、民があつて初めて確立されるものだ。民が全員で国を良く

するのだ。

それがどうだ。騎士達が横暴を働き、民達はそれと敵からの脅威に怯えながら過ごし、子供たちは栄養失調で死んでいく……

こんなもの、独裁政治も甚だしいじゃないか……

選定の剣を手取る時、彼女は言っていたじゃないか……

『……多くの人が笑っていました……それはきつと……間違いではないと思います。』

……今、民から笑顔を奪っているのは……あんだじゃないか……

そうやって、かれこれ数時間も落ち込んでいると流石に周りは真つ暗になっており、これ以上外にいますとリン達にも心配を掛けてしまうので、しけた面のまま、残った火を

消すために水を汲みに行こうと立ち上がった……その時だった。

「失礼」

「うおっ!!」

その時、一切の気配なく火の明かりの中に人が入ってきていた。

「ちよ、やめてくれよ……心臓止まるかと思っただぞ……」

そこに居たのは、フードを目深に被った1人の騎士だった。

「……無礼を詫びよう。しかし、貴殿はここで何をなされていたのだ?」

確かこいつは……なんだったか……監視役? だっけか。

だが、こいつらは人から平気でもものを取るような奴らだ。

「別に、なんでもいいだろ? お前こそなんで来たんだよ。」

そう言うと、監視役はこちらに向けていきなり拔剣した。

「私は貴殿に用があつてここに来た。．．いや、正確には、貴殿の持つその槍だ。」

いきなりのことに、言葉にならない驚きを隠せない俺に、そいつは畳み掛けるように言った。

「要件を言おう。私は、貴殿に決闘を申し込む。」

月明かりの元、焚き火は静かにその煌めきをなくした。

## 第10話 月下の剣戟（前編）

俺が呆けている間にも、目の前の騎士は抜剣した騎士用の鉄製剣を構えている。

「・・・一体どういうことだよ・・・なんでさつき会ったばかりの他人に剣向けてんだよ!!」

俺は、状況は全く呑み込めていなかったがさつき会ったばかりの俺に対して剣を向けているこの騎士に対して言い知れぬ怒りを覚えた。

「お前らは村の人から食料をむしり取るだけじゃ飽き足らず！さつきの俺の態度に腹を立てて報復でもしに来たのか!?それともただむかつくからという理由だけで俺を殴って蹴って、ストレスのはけ口にでもしに来たのかッ!?ふざけんナツ!!」

もう、俺の中でこいつらは一様にして『悪』だった。

いくら、『王の命令』だと『明日生きるため』なのだとしても、

それを免罪符にして他者を貶めてもいいという理由にはならない。絶対に。

今のこいつらは、免罪符を得たことで平気で罪を犯すくそ野郎どもとやっていることが何も違うわい。

本当に、ふざけている。

・・・しかも、それをさせているのがアーサー王だということもなお俺をイラつかせた。

なんで俺の理想が・・・夢が・・・その実態がこんなものだと・・・

そう突きつけられているような気がしてならなかった。



ふ  
ざ  
け  
る  
な

「別にいいぞ、やってやるよ決闘。どうせ周りもくそ野郎共の観衆がいんだろ？俺を全員で嘲笑ってんだろ？……あんまりなめてんじやねえぞ！お前を負かして、周りの奴

らのにやけ顔ごと吹き飛ばしてやるよ!!」

そこで、俺はその怒りを目の前の騎士にぶつけることにした。

確か、こいつはここに来た騎士たちの中で最も強い奴だつてくそ野郎が言つてたな。なら、こいつを倒せば、流星に周りで見ているだろう騎士たちもなめた態度はとらなくなるはずだ。

楽勝だろ。

こつちにはチートがバンバン詰まった槍があるし、腐つても聖杯と槍が作った不死身の体だつてある。

そして、ただ鬱憤を晴らしたかつた。

「・・・貴公は何か勘違いをしておられる。私の目的は初めに言つたように、貴公と貴公の持つその槍についてだ。そもそもこれは私の独断であつて、団長やその他の団員たちの関与は一切ない。よつて、ここに団員はおらずすべて私の私情で動いている。」

・・・あ、

・・・そうだ。

いきなり剣を向けられたかとに対する驚きと頭に血が上つていたせいで忘れていた

が、こいつは初めに『槍に用がある』って言つてたじゃないか。

「だが、確かに今貴公は『受けて立つ』という宣言をしたな？ならば始めさせてもらおう」

「え？ちよ」

いきなり宣戦布告をした騎士は、うろたえるガレウスを気にも留めず腰を下ろし：

「・・・ハッ!!!」

突き出した剣で慌てて槍を持ったガレウスの腕を切り飛ばした。

「……は？」

ソレを知覚した直後、待つてましたと言うように想像を絶する痛みが一瞬だけ走つた。

熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱いあついあついあついあついあついあついあついあついあついあつい  
ツイアツイアツイアツイ  
■ ■



ただ日本でのほほんと暮らしていたのだ。そんな彼が、普通《腕を切り飛ばされる痛み》なんてものを感じる機会は相当少ないだろう。

その一瞬で、彼が感じたのは、圧倒的な熱だった。

まるで、皮膚に焼けた鉄をくつつけられたようにも感じられたし、炎にそのまま傷口を炙られたようにも感じられた。

だが、相手の剣の腕前が良かったのか、斬られたと言うような痛みは一切感じなかった。

そして、同時に勘違いをしていた。

昨日、ガレウスが上空100メートルから落下した時、あの時のガレウスのダメージは作り替えられた直後体を持ってしても即死だった。

だが、即死だったからこそ、脳が痛みを近くする前に機能停止し、即時再生したこと

で痛みを伴うことなく復活できたため、これさえあれば痛みを感じることもなく即時再生できるのだと思っていた。

そんな上手い話があるわけが無いというのに。

「一体何をした。」

惚けていた脳を再び再起動し、声のするほうを向くと、フードでまだ顔は見えないが、明らかに驚いたという声で話す騎士がいた。

「私は確かに今、貴公の腕を切り飛ばした。それに対し、貴公はなんの反応も見せることなく、抵抗もせずになんかそれを受けた。幻術か。いや、幻術など、対魔力の強い私にかかるとは思えない。なるほど。それが槍の力ですか？」

騎士は騎士で、ブツブツと独り言を言つて、自己完結したようだ。



「では、私ごとき槍を取るまでもないということですか。そちらこそ、私をあまり舐めないでくださいっ！」

その瞬間、またも騎士は目にも止まらぬスピードでこちらに接近してきた。

「っ!!クソがっ！」

色意と話が噛み合っていないまま突き出された騎士の剣が胸元に迫る。

そして、目に怒りと恐怖、戸惑いを込めてその迫る様を見る。

だが、流石に予備動作が見えていたし、先程の痛みをもう一度見舞われるのは勘弁なので、悪態をつきながら直ぐにその場から飛び退き、見えないその剣の軌道から逃げる。

しかし、直ぐに横風の一閃がこちらに向かって飛んできた。

「ツ！ロングヌスツ！」

だが、その一閃を関係ないというように立ち上がり、腕とともに飛んでいった槍を呼ぶ。

すると、その声に呼応するようにヒュツ！という軽快な音と共に赤い一閃が飛んできた。

ガキンツ  
!!!!

「ツ・・・  
ほう。」

そして、速度をそのままに騎士の横風の一閃をいなし、手の中に収まる。

槍が手元にあるだけでも相当安心出来る。

「やっと槍を手を取っていただけましたか。なるほど。纏う気が変わりましたね。それでは、私も相応の覚悟で行きましょう。」

その言葉とともに、騎士の体から一陣の風が吹き出しそれと共に羽織っているフード付きのマントが下に何か厚い鎧か何かを着たように盛り上がった。

そして、それと共に発せられる威圧の質が一気に上がった。

まるで、空気さえも軋ませるような極大のプレッシャー。

常人がこんな気に晒されればそれこそ発狂間違いなしだろう。

「ハアツ!!!」

それと共に、騎士がもう一度掛け声を上げながらさらに速度を上げた剣を掲げ迫る。

「ツアアアアアアアア!!」

それに合わせ、俺も目の前まで来てやつと知覚出来た自分の脳天を狙うその剣に槍を合わせ、雄叫びと共に跳ね返す。

「フツ!!」

だが、騎士は跳ね返された勢いそのままに体を回転させ、再び横風の一閃を放つ。

美しいその軌道に乗った剣はガレウスの脇腹を捉え、だが、その直前に作り替えられた体による超人的な反射神経でその間に槍を入れ、剣と槍を通し、2人の力が拮抗する。

だが、それは一瞬で、それ以上踏み込めないと理解した騎士はその体をくねらせ、すぐさま後退。だが、次の瞬間にはその化け物じみたスピードで地面を陥没させながら凄まじい突きを放ってくる。

「チイツ!!!オラアッ!!!」

騎士がもう一度突き出してきた剣をいなしながら槍を回し、穂先とは反対側の持ち手

の方を相手の懐に入れ、そのまま突き出し、後ろに下がらせる。

「ほう。なかなかやりますね。ですが、どうしたのですか？もう息が上がっていますよ？まだ決闘は始まって2分も経っていませんよ？戦いに疲れるには、いささか早くありませんか？」

「ハア。ハア。ゲ。ホツゲホツツ。ハア。まじかよ。こんだけやってまだ。ハア。2分も経ってないとか。」

「バカじゃねえの？」

更に、本人は気づいていない。いや、気づくことを恐れているが、槍を持つてから武器を撃ち合った数。たったの4回。

本人にとつてはそれこそ、凄まじい集中力によつて知覚している時間は永遠にも感じられているが、その実、戦いは2分どころかようやく1分経った所で、撃ち合ったのは4回という戦いの始まりの始まり。

その時点で、ガレウスの体力は既につき果てていた。もう、笑うしかない有様である。

——この戦いは始まりからこの瞬間まで、全てがガレウスにとつてキャパシティをオーバーしていた。

全てがこの体の化け物じみた反射神経によつて繰り広げられていただけで、ガレウス

本人の意思は全く介入していない。と。言うより、一切の介入が出来なかった。

その証拠に、ガレウスは一切、その場から動いていない。

本来ならバックステップなどをして繰り出される高速の剣戟を避けることだつて出来たはずだ。

それが出来なかったのは、一重にそこまで考える余地がなかったからだ。

恐怖から来る足の震えはなく、そもそも恐怖を感じているという自覚すら感じる暇がない高速の剣戟。

反射で反応出来たのは腕のみ。更に、相当無理な動きをしている

最後の突きは辛うじて反応したガレウスが自分の意思でやったが、それでさえも脳がショートする寸前でヤケになった結果の判断だった。

更に、反応は出来ているが、今の状況を見て分かるように無理やり体を相手の剣戟に合わせているため、相当体に負担がかかっている。

正直に言つて、あと3戦打ち合わないうちにまたあの痛みを数十倍にしたものを貰うだろうことは容易に想像できた。

「では、少し速度を上げていきましょう。」

その言葉と共に、再び構えに入る。

しかもまだ加速するって

.....

だが、息も整っていないこの状況で打ち込まれたら本当にゲームオーバーだ。ただ反射神経で戦っていても直ぐに負ける。

.....

ん.....負ける.....ッ!!

.....

?

?



「ちよつ、ちよつと待った!!」

ガレウスは、少しでも息を整えるために相手の気を一時的にそらすことにした。

「む。．．．騎士の決闘に待ったとは．．．無粋ですね．．．．．して、如何したのでしようか？」

相手が一応待ったにに応じてくれたことに安堵しながら、先程思いついたある疑問を提示する。

「な、なあ．．．この戦いの勝利条件って．．．．．一体何だ？」

それは、戦いが始まる前に決めるべきであつたが、  
に明確にできていなかった戦いを終わらせる方法だ。  
両者とも頭に血が上つていたため

## 第11話 月下の剣戟（後編）

俺が提示した疑問に対して、目の前の騎士も動きを止めた。

「む、それについては確かに決めていませんでしたね。確かに、通常の決闘であればどちらかが死ぬまで終われませんが、貴公にも聞きたいことがいくつもあります。それに、貴公は槍の力によつて即時再生することが出来るため、戦闘続行不可能にすることは出来ない・そうですね・」

少し考え込むように騎士は黙り込む。

てか、槍の能力が傷の即時再生つてよく分かったな。

あれだけ見てたら一時的に傷を治すとかしか思いつかんだろ。普通、『いくら切つても即時再生する』だなんて思いつくだけでありえないと切り捨てるだろ、絶望的すぎて。

その間に俺は俺で息を整えながらこの後どう立ち回るかを考える。

正面切って撃ち合う。論外。

何とか反射だけで相手の攻撃をいなし続け、相手を疲れさせる。無理

降参。最終手段

まず、俺の力だけで戦いを続けるのは無理だな。

なら

「そうですね、先に一撃入れた方が勝ちということにしましょう。」

考えられる中でもまだいい方の勝利条件だ。

「よし、分かった。」

「では、仕切り直しと行きましょう。」

その言葉と共に、騎士は剣を自分の横に構える。

いわゆる、剣道の八相の構えというものに似ているやつだ。

そのまま上段から来るのが主流だが、この騎士の速さならば、俺が上段に構えるような動きをした瞬間、その剣を下に落とし、下から斜めに袈裟斬りすることも可能だろう。

その場合、体が右斜めからズレる。

一見単純に見えても、その速さをもつてすればそこから繰り出される技は数百通りにも及ぶだろう。

だが、今からしようとしていることに比べたら、そんなことは関係ない。

「よしいいぜ、やるか。」

.....  
ワルツ・オブ・ロンギヌス  
 踊り狂う不滅の槍ツ!!

初手で一気に無数の槍を出現させ、相手に畳み掛ける。

それは、槍に本来貯蔵されていた魔力と、現在第2魔法によって少量ずつ魔力を搾り取っている聖杯から更に無慈悲に吸い取った少量の魔力を使って初めてなし得た荒業

中の荒業。

別に、俺自身が戦う必要は無い。

出現した数は、およそ50数本。

森の隙間すら埋め、月の光さえも遮るその大軍はただ目の前の1人に向けられたものだ。

流星に、数の暴力には叶わないだろう。

過剰戦力であるか？

否。

それは結末を見れば分かることであり、答えは現状にある。

「んじゃ、第2ラウンドだッ!!」

そして、ただ一筋、ただ一刺しの傷をつけるためのみに幾条もの槍が空を舞う。

「行けッ!!」

右手にもつ槍を振りながら、分体に命令する。

バン  
ツツ  
!!!!!!!

途端、50数本の槍は一気にその速度を0から音速以上に加速させ、周りで起こるソニックブームも関係ないとばかりに目の前の敵に殺到する。

周りの木の枝は一気に折れ、まだ僅かに灯っていた火も完全に消えた。

また、真横にいたガレウスはその振動が体の芯まで届き、皮膚は発生したかまいたちによつて至る所に傷がつき、鼓膜も破れた。

だが、即時再生しその顔に少しの不快感を残しながらも薄く開いた目から敵の方を見る。

そして  
.....  
絶句した。



なんと、騎士は迫り来る槍の全てを弾き、避けて、少しずつだが自分の方に近づいて来ていた。

「ハアツ!!!」

全く怖気付くことなく、まるで檻のように槍の穂先が騎士を囲むも、関係ないとばかりに短い掛け声と共に飛び出し、飛び出した先に迫る槍の軌道をその剣の腹で逸らし、最低限の動きと剣への負担を極限まで減らした動きで無理やりに突破口を開き、後ろから殺到してくる槍を空に跳んで躲す。

その動きは、確実に両手剣などという代物を使って出来るものではなかったが、本当に力技なのだろう。ただの鉄の剣を振り抜いただけで小規模な斬撃が飛ぶのだから。

今度はその宙に舞う体に槍が殺到するが、それを騎士は曲芸師もかくやという動きで

飛んでくる槍を足場にし、更にそこを起点にして体を回転させ迫り来る槍の一切と共に地にたたき落として行く。

だが、槍はたたき落とした傍から直ぐに復活し着地した騎士に向かう。

しかし、今度はそれを捌くことはなく一気に加速し前方へと逃げる。

その速度は、槍には叶わないまでも人間が出せるような速度ではなかった。

そして、そのまま呆然と戦いを見ていたガレウスに突進するが、ギリギリの所で追いついた槍が彼を守り、その槍が彼を守っている間に先頭にいた10本近い槍が彼の後ろで高速旋回し騎士に向かって発射される。

「クツ・・・！」

迫り来る槍を再び劍の腹でいなし、即座に宙を舞つて後退。その間に迫っていた槍も難なく対処された。

そして、再び殺到する槍に対して騎士は迫り来る槍を見ることが無く対処し、もう一度ガレウスに迫る瞬間を狙っていた。

「すげえ。」

その様子を見ていたガレウスは素直に騎士の戦いを綺麗だと思った。

さつきまで点いていた火が無くなったことで月光にのみ煌めくそれは、一種の芸術のようで、見る者の心を踊らせた。

目にも止まらぬ攻防。飛び散る閃光。剣と槍がかすれることよって生まれる硬質音と微かに香る鉄の匂い。

その全てが、ガレウスを興奮させた。

今まで、目の敵にしていた騎士だが、今ではそんな感情はどこかに消えていた。

あるのは少しの憧憬と、

カッコイイという単純な感動だった。

▪ ▪ ▪  
だから、当事者である自分がこの戦いの中に入ることが出来ないという酷く単純な現実がものすごく歯がゆかった。

もし自分がこの中に入れたら ▪ ▪ ▪

もし自分がアレと互角に戦えたら ▪ ▪ ▪

想像するだけでアドレナリンがやばいことになるが、それを理性が抑え込む。

普通に力不足だ。

お前にはここに在る資格は無い。

言外にそう突きつけられているような気がして。

目の前で繰り広げられている戦いに『貴様は相応しく無い』と見せつけられているような気がして。

チートだチートだと騒いでいた自分が、

ただただ情けなく思えた。

.....  
だが、忘れてはならない。

.....  
ここは1対1であろうと戦場だ。

そして、戦場ではいつだって油断した者から脱落していく。

「セヤアアアアアアアア!!!」

はっ！として後ろを向くと、そこにはいつの間にか自分の体を飛び越えて後ろに居た騎士が迫る槍を牽制しながら自分の元に飛び込んでくるところだった。

「ツ！させるかッ!!」

そして、それに合わせて自分自身でもオリジナルの槍を構えてその攻撃を受ける。

ガキンッ!!

「ぐわッ!!!」

そしてかかってきたのは圧倒的な力だった。

まるで空からトラックでも降ってきたのかと錯覚するほどに重い重い一撃だった。

そのおかげで、踏ん張った拍子に両腕の骨と腰の骨盤を折られた。

瞬間的ではあったが、腕から肘にかけての骨が粉々に粉碎され、体が崩れ落ちそうに感じた。

だが、相手はたった一撃で骨が折れるとは思って居なかったのだろうか、抵抗がなく

なった俺の腕はふにやりと力なくぶら下げられ、そのまま剣は剣先が俺に触れるか触れないかギリギリの所を通りすぎて地面に刺さった。

瞬間、骨を再生。

そして、すぐさま槍が殺到。またも騎士を遠ざける。

目の前に剣が迫った瞬間、切られたところで再生するのは分かっているでも死というものを直に感じた。

今のは本当に危なかった。

だが、当たり前だ。

本当に、自業自得だ。

こっちは昨日初めて槍を持ったぬくぬく日本で育った一般人。

対する相手は何人も人を殺してきたであろう百戦錬磨の騎士。

いくらチート能力をいくつも持ち、相手を自動迎撃する槍を持ったところで、慢心するなど愚の骨頂だ。

.....  
ん？なんか今の言葉に似たセリフを聞いたことがあるような

.....  
バキンッ  
!!!!!!

.....  
またも懲りずに思考の海に沈んで行こうとするガレウスを正気に戻したのは、何か  
壊れる音だった。

その音の発生源を見ると、なんと騎士の剣が真つ二つに折れていた。

「くっ……」

騎士は苦虫を噛み潰したような声を出し、すぐさま後ろに飛んでその場から離脱。その  
際に後ろにあった槍は折れた剣の柄の方で対処していた。

.....  
なんじゃそりや  
.....



俺は直ぐに槍を停止させた。

「む、なぜ槍を止めたのですか。まだ勝負は着いていません。」

すると、地面に着地した騎士は少し怪訝な声で聞いてきた。

「いや、そつちの剣が折れてんだからもう終わりだろ？」

「そんなことはありません。私はこの折れた柄だけで戦うことだって出来ます。それに、決闘の勝利条件は武器の破壊ではなく、相手に一撃入れることです。」

「いや、悪あがきはやめて棄権しろよ。」

「悪あがきではありません。それに、騎士の決闘に棄権などという文字はありません。」

「とうか、私が許しません。」

その声は、冷静ではあったが、微かな怒気を孕んでいた。

だから、俺はこれ以上やつても意味は無いと思い、最後の手段に出た。

「わかったよ。それじゃ、俺が棄権するから。この戦いは終わりな。」

そもそも、俺の馬鹿みたいなプライドが発端で続けられた戦いだが、そもそもこの騎士は別に俺を害そうとかそういう意味で決闘を、申し込んだものでは無く、初めに言った通りただ俺に槍に関して俺に聞きたいことがあるだけであり、槍を奪われるのは勘弁だが、対話くらいはする。

だが、俺の申し出に再び騎士は剣呑な雰囲気醸し出す。

「ふざけないでください。騎士の決闘に置いて降参など、絶対に認めません。あまり私を舐めないでいただきたい。剣がないからと言って、貴公に勝つすべならばいくらでもある。」

「ん、俺が剣がないお前と戦いたくないんだよ。」

「それは剣がない私を見くびっているということか。」

再び、怒気を孕んだ声が聞こえてくるが、またも俺は馬鹿みたいに呑気なことを言った。

「いやいや、そうじゃなくて、なんとというか、綺麗だったんだよ。」

「はっ。」

俺の回答に対して今まで冷静な声で応答していた騎士から明らかに動揺した間の抜けた声が聞こえてきた。

「だからさ、その、お前が繰り出す技が綺麗で見とれてたんだよ！月の光に反射した剣戟に感動したんだよ！！だから俺はもっとお前の技が見たいんだよ！！それなのに、こんな形で終わって欲しくないんだよ。」

俺は恥ずかしいのを我慢して吠える。

だが、それは確かに俺の望みでもあつた。

たかが借り物の槍の力で打ち合つて自分は何もしていない雑魚が何を言うかと思ふかもしれないが、俺はそれでも、傲慢にもそれを願つてしまふ。願わずには居られなかつた。

そして、この騎士が繰り出す技は、現代社会に置いて擦り切れてしまつた心にアルトリア初めて見た時以来の感動をもたらししてくれた。

それが、たまらなく嬉しかったのだ。

.....  
すると、騎士もヤケになつて出した大声に少し驚いているようだったが、直ぐに冷静にはなりきれていないようで、若干喜色を孕んだ声で言う。

「そ・そ、そうですか・その、  
あ・りがとうござい・ます・そのように言っ・ていただけ・たの  
は初・めてです・ね・いいでし・ょう。私・は、棄・権を認・めな・いし、貴・方は私・に剣・が無・ければ戦  
わ・ないとい・う・ならば、ど・うすべ・いかな・ど、簡・単なこ・とです。剣・を用・意すべ・い  
の・です。」

そう言う、騎士は刀身が折れた剣を腰にかけていた鞘に収め、丁重に地面に置いた。

その所為一つ一つがまた美しく完成されたもので、あんなことをしていなければ、正に騎士の鏡だと思った。

「すみません、無理をさせてしまいましたね。ありがとうございました。」

地面に置く瞬間に微かに聞こえた声に、本当にこの騎士は凄いやつだと素直に賞賛を送りたくなった。

そして、再び騎士が俺に向き直る。

「さ・て、やはり私には鉄製の剣で戦ってしまうと、いささか負担をかけすぎてしまうようです。ですので、少々羽目を外すことにしましょう。」

その声と共に、またも騎士から風が吹き荒れる。

だが、その威力は先程の比ではなく、枝だけが折れていた周りの木は完全に幹から崩れ落ちた。

そして、その様子を手で発せられる風を目に入らないようさえぎりながら眺めていると、騎士はその手に剣を持つように、手の形を変えた。

少しして周りに吹き荒れていた風は完全に消え、そこにはさつきよりも更に威圧が濃くなつた騎士がいた。

その重圧によつて息もできない。

まるで、蛇に睨まれたカエル■■■■いや、巨大な竜に睨まれているカエルのような気持ちになつた。

濃厚な威圧は、それだけで相手の動きを制限させた。

もしも、これが殺気だつたとしたら、どこぞの《施しの赤ザコ（強）》さんみたく、ビーム出さずに睨みだけで人を殺せると思わせる。



だが、やはりその手には剣は持っていない。

「なんだ？ 剣なんて無いじゃないか。」

「いえ、無礼なのは重々承知ですが、今、私は剣を持っており、それを見えなくする魔術をかけているのです。」

「へえ、そんなこと出来んのか。」

この時の俺は、気付けていなかった。

普通に考えて、こんな魔術使ってしかもこんな技量を持つ騎士が普通にいたならば、ブリテンが減ぶことなんてなかっただろう。

口調だつてまさにソレではないか。

だと言うのに、それに気付けずに馬鹿正直に打ち合おうとしていた。

「あなたの望むような剣の煌めきを見せることは出来ないかもしれませんが、あくまで

も決闘ですので、またこの決闘が終わった後に機会があればまたその時にお願ひします。」

そして、見えない剣を構えて騎士が構えを取るまでも取る。

それに合わせて、自分の限界も超えて槍に魔力を注ぎ、その数を更に10本増やし槍を発射する用意をする。

「よ……し……、なら真剣勝負だッ！行けっ!!!」

既に、息も絶え絶えになっている有様だが、何とか耐えてみせるッ！と意気込む俺に對して

.....  
現実は無慈悲に結果を見せる。

「ストライクエア風王鉄槌ツ!!」

その言葉とともに、目の前で大気が爆ぜた。

一気に飛んでいくはずだった槍たちは突如として巻き起こった飛行機のターボエンジン  
を何十倍にもしたような衝撃によって、彼方へと吹き飛ばされて行った。

「は？」

だが、俺は騎士の放った言葉に驚きを隠せなかつた。

今、目の前の騎士はなんと言った？

風王鉄槌？す、ストライクエアだど？

それは、彼女が彼女ののみが使えるはずの技だ。

まさかまさかまさかマサカマサカマサカ!?

そして、今までの騎士の口調を思い出す。

そして、その圧倒的な力を感じる。

フードで顔は見えないが、隙間から見える青い紋章の入った銀の胸当てが見える

そして、不可視の剣を持っている。

そして、騎士がそんなふうには呆然としていた俺に、好機とばかりに踏み込む。

槍は飛ばされながらも直ぐにその穂先を騎士に向け、空から舞い戻ってくる。

だが、このペースならば最前にいる槍でもギリギリ届かないだろう。

「終わりだッ!!!」

.....

目の前で、剣を掲げて自分に迫る騎士を呆然と見る。

まさかお前は

貴方は

?

「アルトリア」

一瞬。

ほんの一瞬だけ、騎士の動きが止まった。

だが、その一瞬が戦場では命取りだ。

ヒュッ!!!

「クツ！」

すぐそこまで迫ってきていた槍が、一瞬だけ止まっていた騎士の肩口を裂いた。

本当に薄い薄い擦れるほどの傷ではあったが、それは、この戦いの終わりを宣言するには充分だった。

「あつーと、止まれっ！」

直ぐに、殺到していた槍に停止命令をかけ、今しがた決闘に敗れた騎士を見る。

「そのような形で私の虚を突くとは、見事です。いつ気づいたのかは分かりませんが、驚きました。まさか、認識阻害までかけている私を、しかも、アーサーでもなく、アルトリウスでもなく、私の真名まで知っているとは、あなたは、マーリンの手の者だったのですか。道理で完全に槍に認められているわけだ。」

そして、騎士は……いや、彼女は、その事に驚く素振りさえ見せずフードを取った。

そこから初めに露になったのは、月光の元、黄金より尚燦々と光る金髪。

聡明さを感じさせるエメラルドグリーンの澄んだ瞳。

キリツとした少年のような、だがどこか愛らしさを感じさせる顔立ち。

その全てが、総じて彼女であった。

「本当は勝つて聞くことを聞いて名を名乗らずに去ろうと思つていたのですが、名を知られた上負けてしまつては、王としての面子も立ちませんね。改めて名乗りましょう。」



そして、彼女は、無機質な瞳を向けて言葉を発する。

「私の名はアーサー・ペンドラゴン。幼名をアルトリアと言い、民からは《騎士王》とも呼ばれています。」

——ああ、思い出した。

なんのセリフか思い出せなかったが、今、やっと思い出した。

UBW2期で、柳洞寺での最終決戦。

それは、かのAUOに向けてハーレム偽善者が放った一言だ。

『無限の剣を持ったところで——』

その言葉は、今の決闘に面白いほどに当てはまっていた。

『——究極の一を持った相手には対抗できない!!』

.....  
そりゃそうだ。と身をもって知った。

## 第12話 望まぬ花園での会合

「……はあ……」

「む？どうしたんだい？そんな『はあ、こいつやっぱめんどくせえ奴だ』と言わんばかりのため息なんかついて。」

——そこは、一面の花園だった。

見渡す限りの花、華、ハナ……

見た者の気が狂いそうになるほどの色彩を放ち、

嗅いだものの意識を飛ばすほど優雅で苛烈な香りを放つ。

まるでこの世にあるものとは思えないほどの美しさと荒々しさを持つ人類未踏の楽

園。

妖精達の秘密の花園。

またの名を——

——  
ア<sup>理</sup>ウ<sup>想</sup>ア<sup>郷</sup>ロン、という。

そんな永遠に続く花園の中に、ポツンとテーブルと椅子が出され、

—— 2人の人型による質素な茶会が行われていた。

「さつきまでの元気もなくなってしまつて……。」

「……はあああ……。」

「だから、どうしたつて言うんだい？そんな『さつき突つ込もうとしたら』君、まさかそつちの気もあるのかい」つて言つただろうが！このハゲツ！」と反論したそうなため息な

んかついて。」

「分かつてるからよけいやりづらいんだよっ！」

あ、思わず突っ込んでしまった。

「君、やっぱりそっちの気があるんだね……。しかも、早速ヤル気満々だったなんて……。熱心な聖職者ならまだしも天然聖遺物の君に『ピー』して『ぴー』もして『ああん』まですれるなんて、考えるだけでゾクゾク（寒気）がするよ。」

「お前、頭沸いてんじゃないのか？」

——内容は散々なものである。

頭が沸いているんじゃないかと思わせる発言をしているのはかの有名なキングメーカー様、マージンその人である。

そして、そんな彼に突っ込みを入れているのは先程某騎士王さんと対峙したガレウスだ。

「で？結局どうなんだよ？なんか分かったのか？」

頭湧いてる発言を開始早々にかました彼であるが、今はガレウスにとって重要なことについて調べてもらっている。

「うん。大体のことは分かったよ。．．．しかし驚いたねえ。こんな抜け道があったとは．．．」

「とかいいきなりどうしたんだよ? 『ヤラナイカ?』なんていいやがつて。さつきまで普通に話してたじゃねえか。」

そう、冒頭のシーンはマーリンがある事について調べていた時、いきなり『ヤラナイカ!』などと言ったことが発端だ。

「いやー、君が正常な思考回路をまだ持っているかどうかを確かめるために．．．ね?」  
「いや、『ね?』って同意を求められても異論しかねえよ。何をどう血迷ったら正常な思考判断ができるかどうかを調べるのに『ヤラナイカ』が出てくんだよツ!」

「気分」

「だろぅなツ!」

ちくしょうこいつもう手遅れだ！

「で……まあ調べた結果なんだが……率直に言おう。」

すると、さつきまでふざけていたマーリンの顔が少しだけ真剣みを帯びた。それに呼応するように、俺も向き直り……

「……い、いやだなあ……そんなに見つめられると照れてしまうよ……／＼／＼」

……訂正。真剣みもクソもねえわこりや。

「どうでもいいから早く言えよ！あと地味に顔赤らめる演出までしなくてもいいから!!  
気持ち悪いだけだからツ!!」

まあ、顔立ちのいい彼ならば女性視点では顔を赤らめている今の現状はすごくいいものに見えるかもしれないが、男に向けられても困るのはこっちだよ……

「うん、まあいいや。率直に言うとながが描いたのはサーヴァントの魔法陣では無い。」

・・・・・・・・・・・・・・・・はい？

「私の名はアーサー・ペンドラゴン。幼名をアルトリアと言い、民からは《騎士王》とも呼ばれています。」

その声は、フードを取った瞬間に低い男性の声から女性寄りの中性的な声に変わった。

一瞬、その光景に、その声に、脳が溶けそうになった。



喜びが、体を駆け抜けた。

思考が爆ぜ、何もかもどうでも良くなるかのように歓喜に打ち震え、そのまま意識すら遠くなりそうだった。

だが……

『本当に、アーサー王に人の気持ちは分からないとはよく言ったもんだよ』

その言葉が、酷く鈍く、醜く、俺の意識を縛り付けた。

「では、私は負けたのであなたからの要求を飲みましょう。もちろん、王の特権としてこの決闘そのものを無効にするなどという無粋な真似はしません。」

続く言葉に、俺は失いかけていた意識を急浮上させる。

あ、そういえば、経緯はどうであれ俺はこの人に勝ったんだ。

てことは、俺はこの人にどんなことでも要求出来るわけだ。

……え？

「?どうしたのですかそんなに狼狽えて。早く要求するものを答えてください。」

「い、いやいやいやッ!!こ、これは無効試合みたいな感じになるのではないでしょうか!？」

「何を言うのですかッ!!騎士の決闘に置いて交わされた約束は絶対ですッ!それを、騎士王と呼ばれる私が破るなど、あつてはいけないことなのですッ!!」

めっさ怒られた。ぐすん。

「そ、そうは言っても、王様もこんな結果に満足はしていないのでは・・・?」

「いえ、どんな結末であろうと負けは負けです。あなたの策略にまんまと引つかかった私が悪いのです。」

そして、『早くしろ』とばかりに見つめてくるその瞳を見ながら、じゃあ要求はこの試合そのものを無効にしろって感じでいいかなと思っていると・・・

「もちろん、『無効試合にしてくれ』とか『要求するものは何も無い』のような答えは受け取れません。」

直感Aエエエエエ!!

「・・・・はあ、分かりました・・・・ここでは決められませんので、『貸一つ』というのとでよろしいでしょうか?」

「む。ここでは決められないというのですか・・・・ですが・・・・ツ!!・・・・そうですね。貸一つということをお願いします。」

ん?いきなりどうした?と思っていると・・・

ザッザッザッザッ!!

村の方から、何人ががこちらに走ってくる音が聞こえてきた。

・・・考えてみればまあそりやそうだ。

あんなクソでかい爆音立てながら戦って、周りの森の木々も無茶苦茶になぎ倒されりや、そりや飛び起きて気にもなるだろうな。

多分、今まで出てこなかったのは、この音を巨大な魔物か何か音が音の発信源はではないかと思つて警戒していたのだろう。

それで、音が聞こえなくなった今駆けつけているというところか。

「村から人が幾人が走つてきています。正直なところ、私がここに居るのを他の人間に見られるのは非常に厄介です。ですので、この話はまた後日。今はここから逃げましょう。」

そう言つて、こちらに目配せしながらフードを被り静かに歩き出す騎士王様。

それに続くようにガレウスも1歩を踏み出すが・・・

ズシヤッ

「・・・あ・・・れ・・・?」

踏み出した瞬間に体が倒れた。

そして、そんな俺を少し驚きを含ませた表情で見るアルトリアを横目で見ながら、何が起こったか分からずに意識は闇に沈んだ。

「おや？起きたようだね。」

再び目を覚ますと、そこは異世界だった。

……あれ？

な…何を言っているのか わからねーと思うが、  
おれも 何をされたのか わからなかった…  
頭がどうにかなりそうだった…

誘拐だとか神様転生だとか、

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ…

「やあ、大丈夫かい？」

訳の分からない状況に戸惑っている俺に、声をかける者が1人。声からして男のようだが、ずっと目を閉じて意識を無くしていたため、いきなり入ってきた太陽の光とそれに反射するように輝く虹色の何かによって視界がボヤけ、そこに人がいるとしか確認できない。

眩しい光に目を細めながら、声の出どころに話しかける。

「……あの……ここってどこですか？」

「ああ、意識の方は大丈夫みたいだね。ここはどこか、か……ここは星の内海。妖精達の世界から隔絶された理想郷」

……あれ？何だかすごく、嫌な予感。

「そう構えなくてもいいよ。僕はただ、君がこの夢から覚めてしまうまでの間、少しだけおしゃべりがしたいだけなんだ。でも……」

ぼやけていた視界のピン트가徐々に合っていく。

そこにいたのは、まるでプラチナのような輝きを放つ長髪を垂らし、質素ながらも不思議と高級感を漂わせる白いローブを纏った中性的な美丈夫・・・いや、美少年がいた。その眼光から放たれる視線は、優しく柔和なものながら、そのうちには明らかな敵意と不信感を孕んでいた。

「もし私との話の間に嘘をつこうものなら・・・ボクは君と敵対しなくちゃ行けなくなる。」

・・・うひゃ、王様開発部部長が来た・・・

その後、マーリンによって無理矢理作られた茶会の席で、様々なことを話した。

まず、マーリンが俺の発言について真実か嘘かを見抜く魔術を俺にかけ、それが嘘だとわかった瞬間問答無用で妖精？とも現実とも繋げることの出来ない隔絶空間にぶち込むということになった。

そもそも、マーリンが出した何から抽出したかよくわからないが美味しい紅茶もどきの

中に真実のみを言うようにする薬が入ってたそうなので意味はないが。

なんでそんな面倒くさいことしたんだ？と聞くと、

『君がもしかしたら私が思っているよりも強い魔術師だとしたらこの程度の魔法薬じゃあんまり意味がないからねえ。まあでも、見た目通りの素人でよかったよ。』

一言多いんだよ全く。

でも、そこまで入念にアルトリアに近寄る人間を調べよう点に置いてはアルトリアの補佐として信用出来るが・・・

それに、よく考えたら現在の全てが見えるこいつにとつて、俺はいきなり現れた異物だ。

そりゃ警戒もするわ。

それから俺がどうやってここに来たかを懇切丁寧説明してやった。

話すにつれて、不信感は少し強くなってしまったが、敵意はほとんど無くなったように感じられる。

とりあえず、どうやってここに来たのかまでを話した時に、そのとき描いた召喚陣を描いてくれと紙と白い羽根ペンを渡されたので、その場で描いたところで話は一旦打ち切りになっている。

それから数分たったところで、冒頭の衝撃発言に戻る。



「……………はっ？」

おっと、声にも出てしまったようだ。

でも、こんな衝撃発言されたらしようがないと思う。

……………いや、……………だつて……………ねえ……………公式だよ……………？

「うん。確かに、この召喚陣は相当無駄があるけどよく出来たサーヴァントの召喚陣だ。特にこの《七つの筐》とはよく考えたものだよ。確かに英霊を現象として呼び出すには理にならなっている。この私がよく出来たと言うんだから、これを作った魔術師……………いや、過去の記憶媒体から記録された行動を再現させるために少し魔法の域の術式も入っているのかな？どちらにしても、歴史に名を残せるレベルだよ。」

へー。

まあ御三家つて魔術師の中ではちよつと有名だけど、聖杯戦争そのものが極秘に行われていたものだからなー、そんなに凄いものだったんだ。

てか、魔法つて……………宝石爺も介入してたのか？

でも、宝石爺は監視だけで基本的に手は出さないんじゃないか？性格的に。

まあ実際に何があったかは当事者にしか分からないからなあ……………。

「でも、この召喚陣は違うものなんだよ。なんで分かるかい？」

え？…なんで？

いまよく出来た召喚陣って言ったじゃん。意味わかんない。

「その顔は分からないようだね。…君は召喚陣というものがどういうものか知っているかい？」

「いや、さっぱり」

「だろうね。まず、魔法陣全般に言えることだが、大前提としてこれらを書く際には自身《聖名》が必要となる。」

「聖名？」

「そう。魔法陣を使う人間を特定しないと、誰の魔力を使うんだってことになるし、魔法陣の効果を付与する対象を自分自身に固定する必要もある。そのため、魔法陣には必ず自分の名前を用いる必要がある。聖名というのは、基本的にはその人の人の本名だ。魔術師というものは、往々にして自分の素性を隠したがる生き物だからね。」

ああ、なるほど。

つまり、これをサーヴァント召喚に例えるなら、自分の使えるマスターの名前を入れておかないと、召喚されたサーヴァントは、令呪が発現していたとしても誰がマスターか固定されていないってことか。

そりや、契約書に契約者の名前がなけりやまず結べるわけないもんな。

「だいたい分かったようだね。それで、ここに書いてある聖名は《シロウ エミヤ》と  
なっている。だが、君はそのシロウ エミヤじゃないから、この時点で魔法陣が正確に  
機能することは無いんだ。魔法陣の媒体には君の血を使つたと言っているけど、媒体の  
血と別の人物の名前を入れていたらまず機能するわけがないからね。」

「え？でも確かに、本来のものとは全く違うけど機能するには機能したぞ？」

そう、魔術的に機能したからこそ今ここにいるのだから。

「うん。君たちの世界、観測次元では魔術やエーテルそのものが空想上のものであると  
言われているらしいけど、実際にこうなつたのは全てに魔術的要因が関わっているから  
に他ならない。ということは、君が元いた世界は観測次元では無いかもしれないという  
事だ。」

「……つまり？」

すると、マリーンはニヤツと嫌な笑みを浮かべた。

「よくわかつてないようだね。簡単に言えば、君たちの世界も君たちが私たちの世界を  
作つたように、作られた世界、つまり、何者かによる想像物である可能性もあるわけだ。」  
「……は？……それってあんた達だけじゃなくて俺達まで誰かに作られた物語の  
中の人間つてことか？ちよつ！こ、怖いこと言うなよ……」

ちよ、怖がらせんなよ・・・いや、ベベ別にびびびびってるわけじゃないじよっ!? 「まあ、実際にはそっちの世界でも魔術は隠蔽されているだけで、実在するのかもしれないけれどね。それで、さっきの話に戻るけど、君が描いたサーヴァント召喚陣では、例えば君たちの世界に魔術的なものが存在しているようにとどんな形であれ機能することは無いんだ。馬のいない馬車が動くはずがないようにね。」

・・・なるほど。

つまり、コンセントがない家電が動かないのと同じように、魔力供給源が指定されていなかったら動くわけがないんだ。

「でも、さっきも言ったように機能したぞ? もつたいぶつてないでさっさと教えてくれないよ。」

「そうだね。でも、私は最初に言ったじゃないか。これはサーヴァントの召喚陣では無いと。」

「君はこの召喚陣がどこからサーヴァントを持ってくるか知っているかい?」

なんでそんなこと聞くんだ? と言いたかったが、こいつにこれ以上反論してもうけながされるされるだけだろうから仕方なくのつてやろう。

「えーつと・・・確か座ゴーストライナーだとか、境界記録帯とか言うやつ・・・だったか?」

「よく知ってるね。では、その境界記録帯を所有しているのは?」

・・・は？所有？

「うーん・・・人類史そのもの？」

「惜しいね。いい線行っているんだけど、まだ足りない。じゃあヒントだ。この英霊召喚、聖杯戦争とは何を模倣してやっているのかな？」

模倣？確か・・・

「・・・プライミッツマダーの制御・・・だったか？」

「うん、そうだね。ガイアの怪物を制御するため、抑止力は7人の守護者をその場に派遣する。人類が地球の敵に回ってしまった場合、これを行使する権利がある。そして、その7人の守護者らは抑止力から出てくる。ということとは？」

・・・ああ、なるほど・・・

「つまり、英霊を行使する、座を保有してるのは抑止力ってことか。」

「そういう事だよ。そして、英霊は抑止力を介して聖杯戦争という場に引きずり降ろされているんだ。聖杯戦争に使われるまでは抑止力のルールに乗っ取り守護者となるが、聖杯戦争に降ろされると聖杯の決めた独自のルールに変更される。なんというか・・・模倣した人間を独自のルールで動かすというか・・・うん、説明しづらいね。」

つまり、YoOTubeの動画をM03に変換するのと似たようなものなのか？

「まあ、この辺は別にどうでもいいや。つまり、抑止力のそれを聖杯のものにすることで

英霊を召喚している。これだけ分かっていればいい。そしてここからだ、君が描いたものがサーヴァント召喚陣では無いことを説明しよう。」

そう言うと、マーリンは召喚陣を描いた紙を中に投げて杖を一振した。

途端、紙は燃え上がり、俺が描いた召喚陣だけが赤く光り輝き、見やすくズームされた状態でテーブルの上に落ち、そこに焼き付いた。

それから、マーリンは召喚陣を指でさしながら説明していく。

「まず、君が最初に描いたものはサーヴァントを召喚するための召喚陣だ。それは間違いない。それからだが・・・君は触媒に剣を用いたと言っていたよね？しかも《選定の剣カリバーン》と《聖剣エクスカリバー》という剣を」

「あ、ああ。確かにそれらを触媒にアルトリアを引こうと思ったんだ。」

今更考えると何たる愚行。

ほんとにもう・・・この歳になって黒歴史がふえるとか・・・

僕は悲しーです!!

「それで、その配置なんだが・・・こんな風じゃなかったかい？」

そして、マーリンはその手からカリバーンを数本出して、召喚陣を囲むように置いた。

「確かにこんな感じだったと思うけど・・・やっぱあんたはデタラメだなあ・・・」

「ふつ、褒め言葉として受け取っておくよ。それから、エクスカリバーはここに置いたん

じゃないかい？」

それから、マリーンはエクスカリバーを出現させて、魔法陣の中心に刺した。

「・・・なあ、お前って相当チートだよな。」

「チート、というのは何かわからないけど、これはただ形だけを模した贋作だよ。星の聖剣なんて、私でも作るのには骨が折れそうだよ。」

ほら、《作れない》とは一言も言っていないだよなあ・・・

「で、これが君の描いた召喚陣だ。この剣を突き刺した痕も含めてね。」

・・・え？

「そうさ。何度も言うが、たしかに君は英霊召喚の召喚陣を描いた。けれど、エクスカリバーを突き立てた時点でそれは全く別のもの変わってしまったているんだよ。詠唱にも意味があるように召喚陣にも意味がある。この中心の2つの円は《アラヤ》と《ガイア》という2つの抑止力を表している。抑止力とは星そのものだからね。度々円形、球形で表される。そして、その重なった部分に剣を突き立てるということは、2つの抑止力への《介入》を意味しているんだ。しかも、周りにカリバーンを置いたことで王国へと至る三叉路の部分が円環になってしまっている。これでは、力の放出先が全てこの一点に集中してしまい、漏れ出たエネルギーが全てこの召喚陣の中で循環するようになってるけど、この召喚陣で溢れ出るエネルギーはそれこそ災害級の濁流と全く同じくらい

だ。それがたった直径数メートルの円の中で高速で循環する。その事でこの召喚陣の近くにいた君は飲み込まれて我が王の象徴であるエクスカリバーを座標軸にこのブリテンの地へ……はっ！（寝てた）

「ちよ、ちよつと文字数の関係で寝なくちゃ行けなかったから。わかりやすくまとめてくれ。」（メタア！）

「うーん、何言ってるのかは分からないけど、君が何も分かってないという事は分かったよ。まあ、まとめると……」

そして、すんごいいい笑顔でこう言った。

「君が描いたのは抑止力への介入術式なんだよ。」

……はい？（2度目）



## 13話 魔術師とこれから

・・・はい？

「そんな、訳が分からないよおって顔されてもねえ・・・」

「い、いやだつてそうだろう。それこそわけわかんねえよ・・・だつて、そもそも俺には」  
「魔術回路が無い。」

俺の言葉を先回りしてマーリンが言う。

「そう。そもそも魔術回路が無ければ魔法陣どころか魔術の魔の字も使えないし、魔力すら身に宿せない。」

「分かつてるなら・・・」

「だが、私は君が魔法陣を起動したなんてことは一言も言つてないよ？」

・・・は？

「え？どういうことだよ？魔法陣描いたのも俺だし、詠唱したのだって俺だぞ？それなのに起動したのが俺じゃないって・・・」

なんだ？あの部屋に俺以外の誰かが隠れていたとでも言うのか？

ま、まさか!?闇の組織の陰謀が・・・

「ないよ。」

「デスヨネー。」

ならどうということだ？

「確かに、魔力源がなければ術式は起動しない。だが、逆に言えば魔力源さえあれば術式は起動できるんだよ。」

・・・？

「は？だから魔力源がないじゃん。」

「いや、君もいつも見ているものだよ？」

・・・??

「・・・すまん、考えても訳分からんから教えてくれ。」

「いや、考えるもなにも君たちの時代でも神秘が色濃く残っている存在だよ？」

「・・・いや、だからなんだよ!？」

怒鳴ると、彼は馬鹿にしたような笑みを浮かべる。

こいつ正解言う気ねえだろ・・・

「いやあ、この時代でも見れるんだけど・・・ほら、いつも夜空に浮いてるアレ。」

アレ・・・って!!

「まさか、月か!？」

「そうそう。人類未踏である今よりは神秘が薄いかもしいけど、それでもアレは地球の抑止力とほぼ同じ神秘を持つてるからねえ。ほら、君たちの時代でも聞かないかい？ 神隠しって。あれは、自然現象などで偶然描かれた術式が月の発する月光に含まれた魔力で勝手に起動して、その術式内部に偶然入り込んだ人が様々なところに飛ばされるって言うことだよ。」

偶然の要素多いな!？」

いや、でも神隠しって・・・

「日のない所に煙は立たないのと同じで、元がなければ噂も立たないよ。それに、星の内包する神秘は人や神々のそれとは訳が違う。ある意味、ありとあらゆることを成し遂げてしまうようなものさ。」

・・・なるほど。

「ということとは、俺が自分で描いた術式に月の光が無理やり魔力をねじ込んだことで勝手に魔法陣が起動した、ってことか？」

「まあ、簡単に言えばそういう事だね。で、君が刺したエクスカリバーが起点になって座標がこの時代子の場所に確定されて飛ばされたって事さ。」

・・・うん。

「これまでの事も考えると・・・確率やばくね?」

「狙ってやったんじゃないからねえ。あ、あとこつちにやって来てからの出来事は召喚時に起きた弊害のせいだよ。」

? 弊害ってなんだ?

「まあ、どんな形であれ君は一度抑止力という強大な力のうねりを通つたんだ。ということは、この英霊召喚の七つの筐のようにクラススキルのようなものが付与されるはずなんだ。そして、君の場合はそれが幸運を上げるようなものだったんだろうね。」

・・・マ?

「・・・え? じゃ、じゃあなんだ? 俺がこつちに来てから聖杯やこの槍を拾ったり、来たばかりでアルトリアに会えたのはそのスキルのおかげってことなのか?」

「まあ、幸運っていうスキルは付けやすいからね。実際に目に見えて強力だったりする訳じゃない曖昧であやふやなものだから。でも、だからこそ今の人の数よりも自然の数の方が多い時代では強力なものになるんだよ。普通、過去から未来に持つてくるものだからね。」

「なるほどな、通りでこんなに出来レースみたいにことが上手く運んできたわけだ。」

「でも、その幸運も長くは続かないよ?」

「……まあ、そりゃ幸運はあくまでも幸運だからな。」

「ああいや、そういう意味じゃなくてね、そのままの意味で君の幸運は無くなるよ?」

「……どゆこと?」

「だって君、抑止力の排斥対象じゃないか。」

「……マジで?」

え!? 俺抑止力に狙われんの?

「当たり前じゃないか。本来この時代に居ない人間がいるんだ。しかも、ただの一般人じゃなくて聖杯やロンギヌスの槍なんて言う歴史上の英雄になり得る力を持った人間だ。そんな巨大な力で歴史が変えられるなんて抑止力は絶対に許さない。気づかれるのも時間の問題さ。」

「えー……じゃ、じゃあどうすればいいんだよ……」

「うーん、こればかりはどうしようもないから受け入れるしかないねえ。」

「……はあああああ……」

「まあまあ、そんな顔しないで。大丈夫だよ、最悪私が君を実験動物としてここに匿ってあげるから。」

「いや、アヴァロンに置いてもらうのは嬉しいけどお前の実験動物なんぞになるのは絶対にゴメンだツ!!」

まあじかよ・・・まあでも、これは今じゃどうしようもないなあ。

確かに抑止力ですら干渉できない隔絶された空間にあるアヴァロンにいれば抑止力も手は出せないけど・・・

・・・これはのち考えよう。

「おや？問題を先送りにするなんて、感心しないねえ。」

「うるさい、また今度考えさせてくれ。今考えられるようなもんじゃない。」

「それが君の答えならば・・・ところで、君は魔術回路の本数は凄まじいようだけど、魔術は使えるのかい？」

「いや、全く。」

魔力放出は使えるけど。

「まあそれもそうか君には起源が無いようだからね。」

「起源？」

はて、どつかで聞いたような・・・

「起源って言うのは、文字通りその人の起源そのもので様々なものがある《剣》という極端なものもあれば《食べ物 of 名称》や《事柄 of 名称》などというあやふやなものまでね。だが、魔術師は生まれた時からこれらを持っていてその起源に似通った魔術を習得するものなのさ。」

ああ、あれか。エミヤの剣という起源や切嗣の切つて繋ぐつていう聞いただけじゃ意味の分からないようなもんなまで沢山あつたな。

・・・ダークシンプソンは確か傷を開く・・・だつたか？

ありや性根からえぐいよ・・・

「おや？知つているようだね。じゃあ起源を後付け出来るつてことも知つてるかい？」

・・・確か士郎がそうだつたか？

瀕死の体にアヴァロンを埋め込まれて強制的に《剣》という起源を付けられたんだつたか。

「・・・これも知つているとは、君は知識が相当偏つているようだね・・・。」

うつせ、オタクなんて皆そんなもんだよ。

「まあいいや。で、君の場合は聖杯が体に埋め込まれているから、それを起点にロンギヌスの槍が使いやすくなるよう《槍》という起源や、《刺し穿つ》という起源を付与することも出来るよ？」

「え？まじかよ、そんなことまでできんのか・・・。」

「まあ原理は礼装作ると同じだからね。この私に出来ないことは大抵はないのさ！」

いや、そんな胸張つて言われるとむかつく。

「・・・と言いたいところだけど、今日はもう無理みたいだね。時間があと少ししかない

みたいだ。」

あ、結構話し込んでたけどもうそんな時間か。

「さあ、もうすぐ目覚めの時だ。それまでに何か聞きたい事はあるかい？」

・・・聞きたいこと、か。

まあ山ほどあるわな。

これからどうすればいいのかとか、

俺はどういう風に立ち回った方がいいのかとか、

魔術のことや槍のことも・・・

・・・魔術？

「・・・なあ、この時代のこのブリテンにお前以外の魔術師って居ないのか？」

「ん？何を言っているんだ、いるに決まっているじゃないか。最も、魔術師という言葉に私

が当てはまるかと聞かれればどうかと思うけど、いきなりどうしたんだい？」

「いや、ちよつと知り合いの子供がアベレージワンの魔術師なんだけどな、魔術の使い方が分からないんだと。師になる人や親がいらないからよく分かってなかったらしいけど。」

リンに魔術を教えてくれる人が居たらいいと思うんだよなあ。

「？何を言っているんだい。この時代のブリテンには確かに魔術師はいるけどアベレー



「ジワンなんていないよ?」

「……ん?」

「いや、お前は知らないかもしれないけど俺の友達のリンネイルってやつがアブレージワンなんだよ。」

「だから、いないって。私を誰だと思っっているんだい。花の魔術師マーリンだよ?この世界のありとあらゆる場所はこの眼さえあれば分かるんだよ。」

「そういえば、こいつ《千里眼》持ちだったな。」

「いや、でも五大元素全てを使える奴がいてな……」

「ああ、リンネイルと言ったかい?確かにその子は五大元素全てを扱えるようだけど、その子は魔術師では無いよ。」

「……え?」

「なんでだよ、魔術使えるんだから魔術師だろ。」

「いや、彼女には魔術回路どころか魔力すら無いよ?」

「………???

「ああ、よく分かってないようだね。正確に言えばあれは《魔の寵愛者》という彼女特有

の特異的な魔術体質のせいなんだ。魔の寵愛者というのは、まあ例えば私が火の魔術を使ったとする。その時体の魔術回路を通じて体内の魔力が事象に変換されるんだ。でも、炎が燃える時に酸素が少なからず二酸化炭素に変化するように魔術に変換された魔力は少しだけ空気中に残って溶けるんだ。で、その少ない魔力に指向性を持たせて現象化することが出来るという体質なのさ。」

・・・ほへー。

「ん、よく分かってないようだね。でもこれはある意味では物凄く強力な力だったりするんだ。まず、空気中の魔術の残滓を使うだけだから魔力が必要ないため魔力切れや疲労が全くない。さらに、魔術を使うために本来必要な詠唱も必要ないし、使いたい魔術をあらかじめストックしておくことも出来る。そして、この力の最も強力な所は五大元素以外の特殊で例外的な魔術でさえいくらかでも扱えるという所だ。分かったかい？」

・・・つまり、その《魔の寵愛者》っていう体質があれば先制攻撃にはくそ有利だし、虚数魔術みたいなチート魔術まで使える、と・・・

・・・使い方によっては結構チートだな。

そう思った時、視界が徐々にぼやけてきた。

「おや、もうお別れの時間のようだね。まあ君の最後の質問が他人のことについてだつ

たのは予想外だけど、概ね君の事情は理解したよ。」

”もうそんな時間か”と口に出して言おうかと思ったが、口を開こうとしても声は出なかった。

「もう世界が君を捕まえているからね。隔絶した空間とはサヨナラだ。また次の夢で会おう。その時には、君に起源を付与してあげるから。」

そりゃありがたい、ぜひとも頼む。

「ああ、じゃあね。」

おう、またな。

そう思いながら、俺の意識は途切れた。

「……まあ、次の夢に介入出来るかどうかは聖杯のご機嫌次第になりそうだけどね。」

……目が覚める。

瞼を開けると、天井が見えた。

横を見ると、昨日プロウが寝ていたベッドが見える。

……ということとは、多分アルトリアが俺を連れて来てくれたのだろう。

全く、出会ってから迷惑ばかり掛けてしまっているみたいだ。

……後で礼を言わないと。

耳にはよく分からない鳥の鳴き声が聞こえてくる。

・・・こいつら、朝から結構な大声で泣くなあ。

そう思いながら体を起こすと目の前の扉がバタンツ!!と力強く開けられた。

「あ、ああ! 起きたんですね、ガレウスさんっ!!」

出てきたのはブロウディアだった。

だが、様子がおかしい。

明らかに服が汚れているし、激しく運動したあとのように汗をかき、肩で息をしながら真つ青な顔で立っていた。

「お、おう、おはようブロウ。ところで、朝からどうしたんだ? 病み上がりには激しい運動をするのは良くないぞ?」

「そんなこと言ってる場合じゃないんですっ!!」

俺が注意すると、ブロウは大声を出して否定し今にも泣きだしそうな顔を俺に向け  
た。

「姉さんが・・・姉さんがいなくなっただんです!!」

・・・は?